「宗教性」の概念・測定・分析（Ⅱ）*

――「8か国における宗教意識調査」を事例として――

真　鍋　一　史**

Ⅰ．はじめに

本稿は、「『宗教性』の概念・測定・分析――『8か国における宗教意識調査』を事例として――」（真鍋、2016）の続編であり、大正大学の星川啓慈教授を代表とする科学研究費基盤研究（A）「生命主義と普遍宗教性による多元主義の展開――国際データによる理論と実証の接合――」でなされた「8か国における宗教意識調査」のデータ分析をとおして、人びとの宗教性に共通する普遍的・基底的・包括的・本質的な諸要素とその構造を理論的・実証的に探っていく試みである。

前稿では、このような問題関心にかかわる、宗教性に関する「理論的研究」と「実証的研究」のこれまでの先行研究の成果を取りまとめるとともに、そのような宗教性が「一次元的に捉えられるものであるか」それとも「多次元的に捉えられるものであるか」という問題を、独自に、L. Guttmanの開発になる「最小空間分析（Smallest Space Analysis： SSA）」を用いた「8か国における宗教意識調査」のデータ分析にもとづいて検討した。

では、そのような前稿の続編として位置づけられる本稿では、「何をするのか」というと、この点についても、「理論的な目標」と「実証的な目標」があげられる。

1．前稿では、Durkheim（1912＝1975）、Otto（1936＝2010）、Eliade（1957＝1969）によりながら、「宗教性（religiosity）」という概念が「一般的・抽象的な側面」と「特殊的・個別的な側面」という2つの方向を持つものであることを理論的に確認した。いうまでもなく、「8か国における宗教意識調査」において焦点を合わせたのは、後者の側面ではなく、前者の側面である。

こうして、「理論的な考察」という点においては、前稿では、以下の問題が残されたままとなっている。

（1）前稿の問題関心は、「人びとの宗教性に共通する普遍的・基底的・包括的・本質的な諸要素の探求」というところから出発しながらも、それは関連文献の精査をとおして、「宗教性の多次元性の導出」という方向に向かうこととなった。

ここから、では「宗教性は多次元的に捉えられるものである」と結論づけることができるのであろうかという疑問が出てくる。本稿では、このような疑問に対して、どのように答えるかをめぐる筆者の方法論的な立場について述べる。

（2）確かに、「宗教性」というテーマについても、「次元の確定」をめぐる議論は重要な課題であるといわなければならない。社会測定の研究領域の日本における先駆者の一人である安田三郎（1960）は、つとに、つぎのように指摘している。

> 「自然科学その他では、取り扱うべき次元はすでに確定してしまっているものが多いが、社会学においては、取り扱うべき次元の確定が研究の第一歩になる。もちろん、常識は、多数の次元を社会学に提供する。しかし、それらが社会学にとってすべて、適合的であり、必要かつ充分であるわけではない。」（p.14）

---

*キーワード：宗教性、宗教的な「観念・イメージ・意識」、最小空間分析（SSA）、ファセット・セオリー、因子分析
**関西学院大学名誉教授、青山学院大学地球社会共生学部教授

しかし、そうだからといって、宗教性をめぐる「理論的な考察」が、「次元の確定」と呼ばれる知的営為に限定されるわけでは決してない。現代における宗教社会学の視座からするならば、そこには対峙すべき大きな課題がある。それは、「宗教多元主義（religious pluralism）」と呼ばれる「経験理論／規範理論」である。じつは、本稿の問題関心の出発点にあった「人びとの宗教性に共通する普遍的・基底的・包括的・本質的な諸要素の探求」というアイディアは、「宗教多元主義」と呼ばれる志向性と深く通底しているところがある。それは、どのように理論的に議論されるであろうか。これこそが、ここでの最大の課題というべきものであろう。本稿では、この点についても、最後に、今後の本格的な議論に向けての「論の構築」をめざす「目論み」について記しておきたい。

2. 前稿では、以上のような「理論的な考察」にもとづいて、「実証的な検討」、具体的にいうならば、「8 か国における宗教意識調査」のデータ分析を試みた。すでに述べたように、この「宗教意識調査」は、科学研究費基盤研究（A）による共同研究として実施されたものであり、メンバーの一人である大阪大学の川端亮教授は、研究成果の公表の先駆けとなるデータ分析を行ない、その結果を「宗教的信念における共通の因子――8 カ国調査の結果から――」と題する論文にまとめ、『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』第 42 巻、2016 年に発表している。

じつは、筆者による前稿のデータ分析は、この川端論文（2016）に触発されて、なされたものである。まさに「先達はあらまほしきものなり」といわなければならない。こうして、データ分析の「問題関心」は、川端と筆者とでオーバーラップしながらも、やや異なる点がある。川端は、「宗教文化の異なる国ぐににおいても、その宗教意識からは共通の因子構造の抽出の可能性があるのではなかろうか」という「問い」を立て、その確認のために「因子分析」という技法を用いた。それに対して、筆者は上述の「理論的な考察」から「宗教性の多次元性」を想定し、そのような宗教性の捉え方に適合的な技法として SSA を選ぶに到った。そこで、そのようなデータ分析の結果を報告する前稿には、以下のような問題が残されることとなった。

（1）前稿での SSA によるデータ分析は、川端の「因子分析」の結果との比較を目標としてなされた。そして、川端の「因子分析」は 8 か国をまとめたデータについてなされていた。そこで、筆者による「SSA」によるデータ分析も、それに合わせて、8 か国をまとめたデータについて行なった。しかし、それだけでは、8 か国のそれぞれの相違点は見えてこない。

（2）前稿では、川端の「因子分析」の結果と筆者の「SSA」の結果との比較という目標を掲げながらも、両者の結果についての方法論的な議論は十分に展開することができなかった。

さて、以上において、前稿で残された問題を、「理論的な側面」と「実証的な側面」に分けて述べてきた。こうして、前稿の続編である本稿で「何をするのか」「何を取りあげるのか」「何に取り組むのか」は、すでに明らかとなった。本稿では、このような前稿で残された課題に、理論的・実証的にアプローチしていくのである。まず「実証的なアプローチ」から始めて、最後に「理論的なアプローチ」へと論考を進めていきたい。

Ⅱ．8 か国における宗教意識調査の概要

「8 か国における宗教意識調査」の概要については、川端論文（2016）で詳細に説明されている。そこで、筆者の前稿では必要最小限の事項のみを記した。本稿でも、再度、それをそのままの形で掲載しておくことにする。

（1）問題関心

宗教性の諸要素とその構造の交差国家的な共通性が示唆する普遍宗教性の探索というのが、この調査研究の基本的な問題関心である。

（2）調査票（質問紙）作成

以上の問題関心に合わせて、つぎのような手順で質問文の作成がなされた。

①広く「キリスト教」「イスラム教」「仏教」「道教」「神道」などについての国内外の「専門書」「一般書」「啓蒙書」などから「宗教の概念・理論」「教義・教理」「宗教の機能・役割・効用」「宗教的な信念・態度・実践・行動」などに関するステートメントを抜き出し、「データベース」を作成する。

②それを、再度検討し、いくつかのステートメントを削除するとともに、新しいステートメントを追加し、最終的に188のステートメントが作成された。それらのステートメントを、ワーディングなどの検討をとおして、質問文の形に仕上げていく。

このような手順で、「宗教性」に関する188の質問項目が構成され、それに調査対象者の属性（性、年齢、学歴、職業、居住地域――ただし、アメリカ合衆国の場合は、さらに人種・エスニシティを含めた――）を加えて、調査票（質問紙）が作成された。しかし、188項目というのは、1人の調査対象者に1回の実査で回答してもらうには、あまりにも多すぎるといわなければならない。そこで、8か国の対象者全員に尋ねる共通の質問項目を5項目とし、それ以外の183項目を三等分し、61項目ずつを8か国の対象者の3つのグループに質問するという仕方で調査をした。

(3) 調査対象国

世界の主要な宗教を信じている人が多い国を選び出す。イタリア（キリスト教・カトリック）、アメリカ合衆国（キリスト教・プロテスタント）、ロシア（キリスト教・ロシア正教）、トルコ（イスラム教）、インド（ヒンドゥー教）、タイ（仏教）、台湾（道教）、日本（仏教、神道）。

(4) 調査方法

①調査票の翻訳：翻訳会社に委託。

②実査：調査会社に委託して、2015年1月、3月にインターネット調査（性別と20代、30代、40代、50代の年代を人口構成比に合わせて割り当てた）を実施。

③質問項目と調査対象者：上述のように質問諸項目とそれに答えてもらう調査対象者を3つのグループに分けて8か国で調査（第1グループの61項目：3053人、第2グループの61項目：2969人、第3グループの61項目：3049人、合計183項目：9071人）。

(5) 回答形式

いわゆる「ステートメント・テスト」という形式で、188のステートメントに対して、7つの選択肢で答えてもらう形式（1. 反対　2. どちらかというと反対　3. どちらともいえない　4. どちらかというと賛成　5. 賛成　6. 意味が理解できない　7. 答えたくない）。

Ⅲ. SSAによるデータ分析

すでに述べたように、前稿では、このような「8か国における宗教意識調査」のSSAによるデータ分析を、8か国の調査結果の「統合データ」を用いて行なった。本稿では、同じくSSAによるデータ分析を、8か国のそれぞれの国――インド、トルコ、日本、アメリカ合衆国、イタリア、タイ、台湾、ロシア――について試みる。

ここでは、SSAによるデータ分析については、以下のデータ分析の結果の「読み取り」に備えて、必要最小限の事項について、再度、記しておきたい。いうまでもなく、そのような記述は、SSAと呼ばれる統計的なデータ分析の技法についての解説から始めなければならない。

SSAは、社会測定の研究領域において、「ガットマン・スケール」で名を馳せたLouis Guttmanによって開発された技法の1つである。SSAは、「多次元尺度構成法（Multidimensional Scaling）」の系列に属し、「マトリックス」の形で示されたn個の項目間の関係をm次元（m＜n）の空間におけるn個の点の距離の大小によって示す方法である。相関が高くなるほど距離は小さくなり、逆に相関が低くなるほど距離は大きくなる。通常は諸項目間の関係を視覚的に描写するために2次元（平面）あるいは3次元（立体）の空間布置が用いられる。アウトプットの座標軸には固有の意味はなく、この点が因子分析と異なるところである。計算の基本は順位イメージ原理にもとづくものであり、2次および3次元の空間布置はいずれも図心（centroid）や座標（coordinate）にとらわ

れることなく、自由に諸項目の全体の布置様相に焦点を合わせて「読み取る」ことができる（Levy ed., 1994；真鍋, 1993 ; Manabe, 2001；木村・真鍋・安永・横田, 2002、なお、そのアルゴリズムとソフトウエアについては、前稿の Appendix Ⅱを参照されたい）。

ここで、Guttman の SSA について解説する場合の重要なポイントは、それが単にデータ分析の技法にとどまるものではないというところにある。Guttman による cumulative knowledge の創造は、その「手続き」と「技法」と「理論」のいわば三位一体ともいうべき形でなされた。それは、より具体的にいうならば、つぎの 3 つの領域から構成されるものである。(1) ファセット・デザイン：質問紙調査の理論的仮説を表現する独自の手法（マッピング・センテンスなど）の創造、(2) ファセット・アナリシス：データ分析の技法（その 1 つが SSA）の開発、(3) ファセット・セオリー：質問紙調査にもとづく人間行動の諸法則／理論の定式化、がそれである。

ここでは、「ファセット・デザイン」と「ファセット・アナリシス」についてはしばらく措くとしても、「ファセット・セオリー」については、SSA マップの「読み取り」の準備という点からして、どうしても触れておかなければならない。

Guttman は、SSA という技法を用いて、「ファセット・セオリー」と呼ばれる「質問紙調査に対する回答として捉えられる人間行動の諸法則とその理論的根拠の定式化」を進めた。その 1 つに Regional Law がある。それが Regional Law と呼ばれるのは、SSA の描き出す幾何学的形状（configuration）によって、質問諸項目間の関係の構造が視覚的に空間の region として捉えられるからにほかならない。

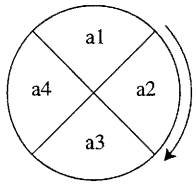
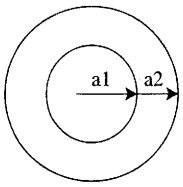
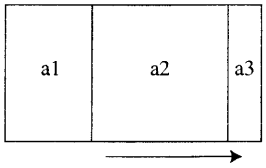
Guttman は、多くの大規模な質問紙調査のデータを用いて、さまざまな Regional Law を構築してきたが、それらはすべてつぎの基本形から派生してきたものといえる。質問諸項目の内容（domain）についてのファセットの諸要素（element）は、それと同数の regions に分割される SSA の空間に対応する。ファセット（の諸要素）が空間の分割において果たす役割には 3 つの種類がある。ファセットが「ランク・オーダー」（賛－否、高－低、大－小などの一次元的な順序）を持たないものである場合は polar、ファセットが「ランク・オーダー」を持つものである場合は modular か axial というのがそれである。前者に対応する理論は Circumplex、後者に対応する理論は Simplex と呼ばれる。こうして、このファセットの 3 種類の役割が組み合わされて、交差する分割線が cylinder（円筒形）、cone（円錐形）、sphere（球形）、cube（立方体）のような幾何学的な形状を描くことになる。それぞれの形状に対応する理論は Cylindrex、Conex、Spherex、Multiplex と呼ばれる。また modular と polar が組み合わされた形状に対応する理論は Radex と呼ばれる（図 1 参照）。

以上は、SSA マップの「読み取り」のための「基本的な情報」ともいうべきものである。しかし、ここに記しておくべき情報は、それにとどまらない。もう 1 点、いわば「処方的な情報」――Berger と Luckmann（1966＝1977）の用語――ともいうべきものがある。それは、このような SSA によるデータ分析の目標が、川端（2016）による「因子分析」の結果との比較であったということから出てくる。

(1) すでに「8 か国における宗教意識調査」の概要のところで述べたように、人びとの宗教性を捉えるために準備された質問項目は 188 項目となった。しかし、188 項目というのは、1 人の調査対象者に回答してもらうには、あまりにも多すぎるといわなければならない。そこで、調査対象者全員に尋ねる共通の質問項目を 5 項目とし、それ以外の 183 項目を 3 つに分け、それぞれ 61 項目を調査対象者の 3 つのグループ（第 1 グループ、第 2 グループ、第 3 グループ）に質問するという仕方で調査した。このような調査方法を踏まえて、川端（2016）では、第 1 グループ（3053 人）で質問された 61 項目について「主成分分析」を行ない、その結果にもとづいて、因子構造を仮定し、「確証的因子分析」を試み、4 因子構造を確証したのである。

したがって、ここでの 8 か国のそれぞれについての SSA によるデータ分析においても、この第 1 グループに対して質問された 61 項目を取りあ

図 1　ファセットの役割と regions の対応関係

ファセットの役割	⟶ 空　間　の　分　割	
Polar	共通の原点からの区分線が円をいくつかのくさび形（V 字型）に分割する。	
Modular	共通の原点のまわりにいくつかの同心円を描いて空間を分割する。	
Axial	矩形をいくつかの小さな矩形にスライスするように分割する。	

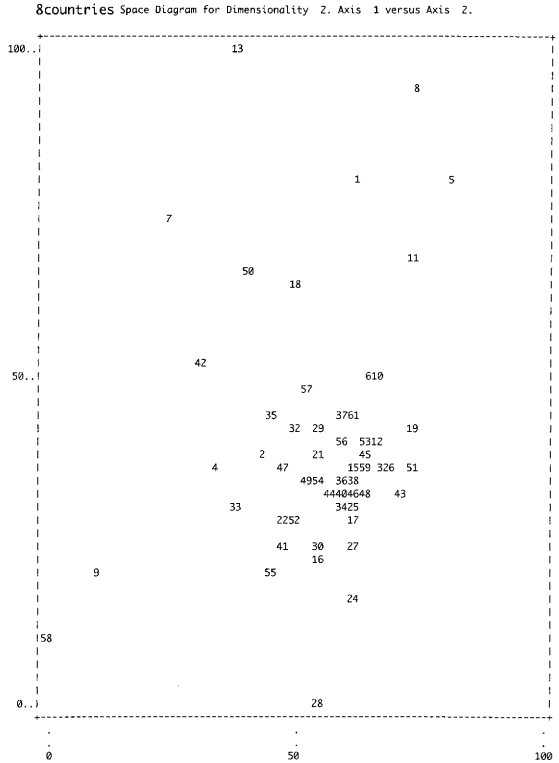
げる。

（2）「処方的な情報」の第 2 のポイントは、質問項目に対する回答の選択肢（response categories）にかかわる問題である。それは、今回の調査の回答形式が、それぞれの項目について、「反対」「どちらかというと反対」「どちらともいえない」「どちらかというと賛成」「賛成」「意味が理解できない」「答えたくない」の 7 つの選択肢で答えてもらう形式となっているが、日本においては、かなりの項目で、「意味が理解できない」と答える回答者の割合が高かったということである。具体的にいうならば、日本の調査対象者 380 人について、「意味が理解できない」という回答者は、0 個（つまり 61 項目のなかで「意味が理解できない」項目は 1 つもないという回答者）が 230 人（61%）、1〜3 個 が 56 人（15%）、4 個 以上が 94 人（25%）――そのなかには 61 項目のすべてが理解できないという回答者が 7 人（2%）いた――となった。そこで、川端は、4 個以上の項目について「意味が理解できない」とした回答者は、「因子分析」の対象から削除するという方針を立てた。

したがって、このような川端（2016）の方針は、ここでも同様に採用することにした。こうして、SSA によるデータ分析で対象とした回答者数は、インド 307 人、トルコ 319 人、日本 286 人、アメリカ合衆国 355 人、イタリア 381 人、タイ 355 人、台湾 351 人、ロシア 339 人で、8 か国の合計は 2,693 人となった。

以上で、SSA によるデータ分析準備が整った。こうして、8 か国のそれぞれについて、上述の 61 の質問の相互間の関係を示す「弱単調整係数（Weak Monotonicity）」のマトリックスを作成し、それを SSA のコンピュータ・ソフトウエアのパッケージ HUDAP（Hebrew University Data Analysis Package）Windows 版――Amar と Toledano（2001）を参照されたい――にかけることによって、8 か国についての「SSA マップ」が得られた（V．8 か国のそれぞれの「SSA マップ」の検討、のところで示した図 3〜10）。そして、ここでは、このような 8 か国のそれぞれについての「SSA マップ」との比較のために、8 か国の統合データを用いた「SSA マップ」も、再度、掲載しておく。後述するように、図 2-①は SSA による質問

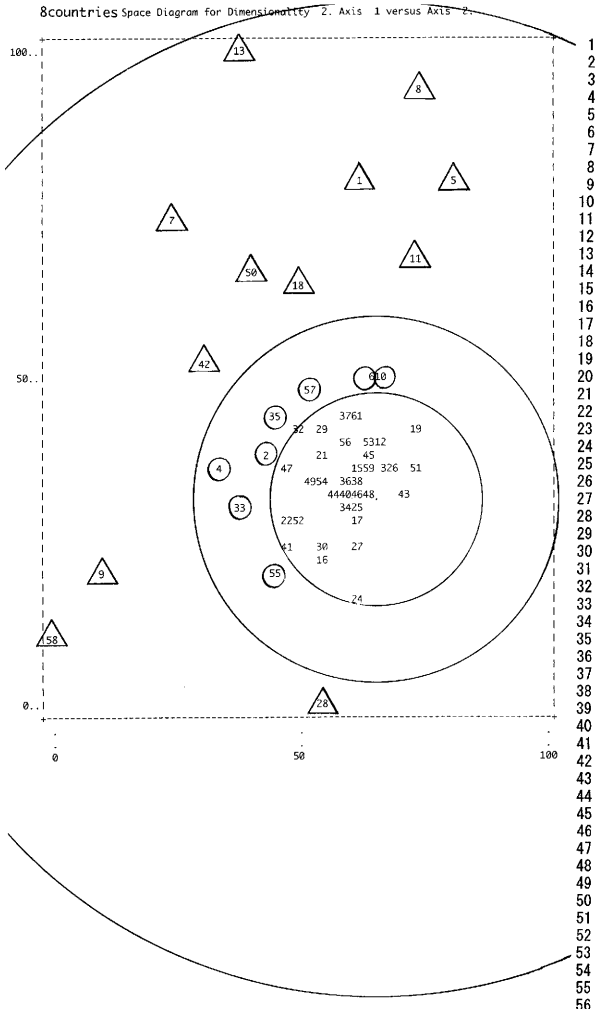
図 2-①　8 か国の総合データの SSA マップ――「空間布置図」――



変数ラベル

1 (151) 自分の思考と感情を、あらゆることに対して肯定的になるようコントロールすること。
2 (73) 宗教教団に従うこと。
3 (75) 「神」に従うこと。
4 (54) 神秘的な体験で、我を忘れること。
5 (175) 他者に憎しみや怒りを持たないようにすること。
6 (104) 宗教の教えについて、書物を読んだり話を聞いたりすること。
7 (97) 瞑想（めいそう）をすること。
8 (141) 「今、ここ」での瞬間を大切にすること。
9 (4) 世間や家族から離れ、ひっそりと隠れて住むこと。
10 (95) 宗教的行動として、神社、寺院、教会などに行くこと。
11 (112) あらゆることに、いつも感謝する気持ちをもつこと。
12 (30) 「神」の愛を感じること。
13 (209) 目の前のものごとに注意を集中すること。
14 (219) 「神」による奇跡はある。
15 (238) 人がこの世で経験するあらゆることは「神」が「魂」の成長のために与えた機会である。
16 (149) 信仰のために迫害されることは、大きな救いにつながる。
17 (106) 「神」を信じることで、病気が治る（なおる）。
18 (199) 世界は、精神と物質という二つの原理でなりたっている。
19 (196) 世界が理不尽に見えるからといって、「神」がいないことにはならない。
20 (56) 「神」を信じることで、この世での願望を実現することができる。
21 (49) この世界には最高の宗教があり、すべての宗教の教えは、その最高の宗教の教えに含まれる。
22 (222) 宗教教団を通じて、救いがもたらされる。
23 (80) 「神」に祈りをかなえてもらうためには、「神」の助けへの代償として、何かを行なったり捧げたりすることが必要だ。
24 (9) 人間は、死後に肉体をともなって、よみがえる。
25 (233) 死後の世界は、より幸福な世界とより苦しい世界に分かれている。
26 (115) 「神」は、存在する。
27 (215) 本当の幸福は、この世にあるのではなく、この世を超えたあの世にある。
28 (92) 運命は変えることができない。
29 (231) ある人の意識が純粋であるとき、そこに聖なる力がはたらく。
30 (108) 「神」を信じることで、社会的地位は上がる。
31 (156) 「神」の力によって、世界は維持され進化している。
32 (134) この世界以外にも、目に見えない世界がいくつかの上下の階層に分かれて存在している。
33 (212) 人は、その人が持って生まれた宿命を実現できれば幸福となり、実現できなければ不幸となる。
34 (166) 「神」は、人間を救うために現れる。
35 (163) 大災害は、人々の心・行いが正しくないことで起きる。
36 (117) 「神」またはその代理が、人間を救うために、この世に生まれてくることがある。
37 (94) 良い行ないにも悪い行ないにも、目に見えない力によって、それ相応の報いや罰がある。
38 (125) 人間は、この世界をより良いものにするという使命を、「神」から与えられている。
39 (32) 何か大きな見えない力によって、私たちは生かされている。
40 (91) 我が国は「神」によってまもられている。
41 (176) 宗教的儀礼において、食物を食べることで、「神」とつながることができる。
42 (152) 執着がなければ、人は苦しみから解放される。
43 (66) 人間の「魂」は清らかでけがれがない。
44 (33) 祈りや宗教的儀礼によって、人は災難や苦境から救われる。
45 (14) 人間と自然とは、どちらも「神」の一部であり、お互いにつながっている。
46 (223) 「神」を信じることで、死後の幸福を実現することができる。
47 (235) 欲望をコントロールすることで、聖なる力をえることができる。
48 (136) この世は仮（かり）のもので、本当に価値があるのは、この世を超えた別の世界である。
49 (192) 一つの「神」が、時と場合に応じて、異なる形で現れる。
50 (160) 利己心が、苦しみや不幸の原因である。
51 (184) 人間には、霊的に「神」に近い人もいれば遠い人もいる。
52 (236) 「神」は、自分自身を否定することで、創造や救済を行う。
53 (110) 「神」を信じることで、心の安らぎが得られる。
54 (127) 宗教的儀礼や修行によって、「魂」はより活発に働く。
55 (121) 「神」と人間とをつなぐなんらかの媒介が無ければ、人は「神」とかかわることができない。
56 (68) 霊の世界は、この世界と密接に関連し合っている。
57 (194) ある人が救われるかどうかは、その人の行為や思いが正しいかどうかで決まる。
58 (71) 人間の本性は悪である。
59 (164) 「神」の力により、死の不安や恐怖に打ち克つ（うちかつ）ことができる。
60 (213) より多くの人々が自分の「魂」を自覚すれば、世界や社会はそれだけよくなる。
61 (211) 人間を含むあらゆるものは、「魂」があるから存在することができる。

図 2-②　8 か国の総合データの SSA マップ――「空間分割図」――



変数ラベル

1 (151) 自分の思考と感情を、あらゆることに対して肯定的になるようコントロールすること。
2 (73) 宗教教団に従うこと。
3 (75) 「神」に従うこと。
4 (54) 神秘的な体験で、我を忘れること。
5 (175) 他者に憎しみや怒りを持たないようにすること。
6 (104) 宗教の教えについて、書物を読んだり話を聞いたりすること。
7 (97) 瞑想（めいそう）をすること。
8 (141) 「今、ここ」での瞬間を大切にすること。
9 (4) 世間や家族から離れ、ひっそりと隠れて住むこと。
10 (95) 宗教的行動として、神社、寺院、教会などに行くこと。
11 (112) あらゆることに、いつも感謝する気持ちをもつこと。
12 (30) 「神」の愛を感じること。
13 (209) 目の前のものごとに注意を集中すること。
14 (219) 「神」による奇跡はある。
15 (238) 人がこの世で経験するあらゆることは「神」が「魂」の成長のために与えた機会である。
16 (149) 信仰のために迫害されることは、大きな救いにつながる。
17 (106) 「神」を信じることで、病気が治る（なおる）。
18 (199) 世界は、精神と物質という二つの原理でなりたっている。
19 (196) 世界が理不尽に見えるからといって、「神」がいないことにはならない。
20 (56) 「神」を信じることで、この世での願望を実現することができる。
21 (49) この世界には最高の宗教があり、すべての宗教の教えは、その最高の宗教の教えに含まれる。
22 (222) 宗教教団を通じて、救いがもたらされる。
23 (80) 「神」に祈りをかなえてもらうためには、「神」の助けへの代償として、何かを行なったり捧げたりすることが必要だ。
24 (9) 人間は、死後に肉体をともなって、よみがえる。
25 (233) 死後の世界は、より幸福な世界とより苦しい世界に分かれている。
26 (115) 「神」は、存在する。
27 (215) 本当の幸福は、この世にあるのではなく、この世を超えたあの世にある。
28 (92) 運命は変えることができない。
29 (231) ある人の意識が純粋であるとき、そこに聖なる力がはたらく。
30 (108) 「神」を信じることで、社会的地位は上がる。
31 (156) 「神」の力によって、世界は維持され進化している。
32 (134) この世界以外にも、目に見えない世界がいくつかの上下の階層に分かれて存在している。
33 (212) 人は、その人が持って生まれた宿命を実現できれば幸福となり、実現できなければ不幸となる。
34 (166) 「神」は、人間を救うために現れる。
35 (163) 大災害は、人々の心・行いが正しくないことで起きる。
36 (117) 「神」またはその代理が、人間を救うために、この世に生まれてくることがある。
37 (94) 良い行ないにも悪い行ないにも、目に見えない力によって、それ相応の報いや罰がある。
38 (125) 人間は、この世界をより良いものにするという使命を、「神」から与えられている。
39 (32) 何か大きな見えない力によって、私たちは生かされている。
40 (91) 我が国は「神」によってまもられている。
41 (176) 宗教的儀礼において、食物を食べることで、「神」とつながることができる。
42 (152) 執着がなければ、人は苦しみから解放される。
43 (66) 人間の「魂」は清らかでけがれがない。
44 (33) 祈りや宗教的儀礼によって、人は災難や苦境から救われる。
45 (14) 人間と自然とは、どちらも「神」の一部であり、お互いにつながっている。
46 (223) 「神」を信じることで、死後の幸福を実現することができる。
47 (235) 欲望をコントロールすることで、聖なる力をえることができる。
48 (136) この世は仮（かり）のもので、本当に価値があるのは、この世を超えた別の世界である。
49 (192) 一つの「神」が、時と場合に応じて、異なる形で現れる。
50 (160) 利己心が、苦しみや不幸の原因である。
51 (184) 人間には、霊的に「神」に近い人もいれば遠い人もいる。
52 (236) 「神」は、自分自身を否定することで、創造や救済を行う。
53 (110) 「神」を信じることで、心の安らぎが得られる。
54 (127) 宗教的儀礼や修行によって、「魂」はより活発に働く。
55 (121) 「神」と人間とをつなぐなんらかの媒介が無ければ、人は「神」とかかわることができない。
56 (68) 霊の世界は、この世界と密接に関連し合っている。
57 (194) ある人が救われるかどうかは、その人の行為や思いが正しいかどうかで決まる。
58 (71) 人間の本性は悪である。
59 (164) 「神」の力により、死の不安や恐怖に打ち克つ（うちかつ）ことができる。
60 (213) より多くの人々が自分の「魂」を自覚すれば、世界や社会はそれだけよくなる。
61 (211) 人間を含むあらゆるものは、「魂」があるから存在することができる。

諸項目の「空間布置図」であり、図2-②は、その「空間分割図」と呼ばれるものである。図2-①は、2次元のユークリッド空間に61個の質問項目の番号が印字された「空間布置図」であり、図2-②は、この空間布置にある「意味づけ」／「解釈」を試みた結果を示す「空間分割図」である。

因みに、「8か国における宗教意識調査」のように、分析のための項目数が多い場合には、それら諸項目の空間布置において、いくつかの項目番号が同じ位置になるということが起こりうる。そのような場合は、初めの項目番号が印字され、後のそれは印字されない。したがって、そのように隠れた項目番号を発見するためには、「アウトプット」のDIMENSIONALITY2に示されたそれぞれの項目の座標上の距離にもとづいて、その「SSAマップ」上での位置を確認する必要が出てくる。本稿では紙面の制約から、それら図表をすべて掲載し、確認することはできなかった。しかし、それによってSSAマップの「読み取り」に重大な問題が出てくるということはなかった。

Ⅳ. SSAマップの「読み取り」

さて、そこで、つぎの課題は、「8か国における宗教意識調査」のSSAによるデータ分析の結果、つまり8か国すべての統合データについての「SSAマップ」と、8か国のそれぞれについての「SSAマップ」に示された結果から、どのような「意味連関」を「読み取る」かということである。ここで「結果」というのは、「x軸とy軸からなる平面上に61個の質問項目の番号が印字された空間布置図」である。この空間布置図から、どのような「意味連関」が「読み取れる」かを探るのが、ここでの課題である。それは、データ分析の「結果」——それは、ここでは「SSAマップ」という幾何学的な図形で示されている——の「解釈」ということもできる。

因みに、このような「結果」の「解釈」の過程は、ある意味で、人びとが、天空に輝く星々を「星座（constellation）」として認識する仕方と通じるところがある——社会学者の見田宗介は、社会現象を説明する諸要因間の関連の構造を独自に図示した「布置連関図式」をconstellationと呼んでおり（『現代日本の精神構造』弘文堂、1965年）、生物学者の福岡伸一は、例えば「カメムシの背中に見えるお相撲さん、華厳の滝の岩壁に浮かび上がる人の顔、夏の夜空に広がる星座」というような人びとの集合的な認識体験を、「空耳（そらみみ）」という現象の視覚版として、「空目（そらめ）」と呼んでいる（『ルリボシカミキリの青』文藝春秋、2010年）——。

では、「SSAマップ」の「読み取り／解釈」は、具体的には、どのように行なわれるであろうか。以下においては、この点についての筆者のアイディアを、段階的に解説していきたい。

1. 繰り返しになるが、ここでのデータ分析の「結果」は、HUDAPと呼ばれるコンピュータ・プログラムのパッケージを用いて作成された、人びとの宗教性に関する質問諸項目の番号の「空間布置図」である。そこで、このような「空間布置図」から、諸項目の「意味連関」を「読み取る」方法としては、つぎの2つが考えられる。

(1) 素朴に「空間布置図」における諸項目の「意味連関」を探っていくという方法。
(2)「ファセット・セオリー」を、このような「読み取り」のための「手引き」として利用するという方法。

しかし、これら2つの方法は、ここで試みられるデータ分析の「結果」からの「意味連関」の「読み取り」という人間の知的営為が、どこまでもその内容の豊かさということを目標とするものである限り、そのいずれかに決めなければならないというものではない。ここでは、(1) の方法から始めて、それを (2) の方法とつなげていくという行き方を提案する。

2. では、人間の「素朴な形状認知」は、どのように始められるであろうか。このような「問い」に対して、人びとの「日常知」は、「森を見る」か、それとも「木を見る」かという2つの様式を提供する。そして、さらに同じ線上で、「科学」と呼ばれる人間の知的営為においては、例えば、

精神医学の領域で開発された「ロールシャッハ・テスト」の考え方がある（Rorschach, 1921＝1976）。それは、偶然によって作られた左右対称のインクのしみなどを被験者に見せて、それが何に見えるかを質問し、その反応から被験者の性格や精神的状態を診断するテストの1つであるが、そこでは、被験者の反応がその形状の「全体」に向けられたか、それともその「部分」に向けられたか、が分析される。

こうして、ここでの「SSAマップ」からの意味の「読み取り」は、その形状の「森」あるいは「全体」を見据えるところから始めることにする。

3.「SSAマップ」の全体的な形状の「素朴な観察」から、そこでの諸項目の空間布置の形については、「凝集（固まって集まっている）部分」と「拡散（広がって散らばっている）部分」の2つがあることがわかる。

そして、「SSAマップ」における諸項目の空間布置に、このような2つの部分があることを確認した上で、まず諸項目の「凝集部分」に目を向ける。それは、つぎのような理由からである。筆者は、いま「SSAマップ」を観察することをとおして、そこに何らかの「法則性」を発見しようとしている。そのような場合、その1つの手がかりは、観察個体――ここでいえば「項目」――の「数」という点であろう。例えば、われわれは夏の夜に多くの小さな虫たちが窓灯りをめがけて飛翔してくることを知っている。そして、このような観察にもとづいて、生物の光刺激に対する「走行性」という法則を定立する。確かに、社会科学の領域においては、「逸脱事例分析（deviant case analysis）」という考え方もある（安田、1969）。しかし、そのような事例といえども、それは大勢となる傾向性の発見があって、初めて注目されることになる社会現象の側面なのではないであろうか。

こうして、そこから「SSAマップ」の全体像の把握のためには、これら諸項目の「凝集部分」を、ひとまずこの「SSAマップ」の中心部分として捉えることが、きわめて「自然な」方策であるように思われるのである。

4. では、「SSAマップ」において、なぜ、このように諸項目が「凝集部分（中心部分）」と「拡散部分（周辺部分）」に分かれることになるのであろうか。

この「問い」に答えるためには、もう1度、「SSA」という技法のtechnicalな特徴に立ち返る必要がある。その特徴の中心には「近接仮説（contiguity hypothesis）」と呼ばれるものがある。それは、具体的にいうならば、「2つの項目が意味的に近いものであるならば、それら2つの項目間の相関関係は大きく、SSAマップにおけるそれら項目間の距離は近い」というものである。この考え方からするならば、諸項目が凝集している部分があるということは、ある意味内容の類似の項目が多くあるということである。そして、それら以外の諸項目が拡散しているということは、別の意味内容の類似の項目の数が、それらに比べると少ないということである。もしも、そのような別の意味内容の類似の項目の数も多いとするならば、「SSAマップ」においては、2つの「中心部分」が見られることになるであろう。以上が、「SSAマップにおける諸項目の空間布置の形状」と「それら諸項目の意味連関の内容」との対応関係（つまり「近接仮説」）についての具体的な説明である。

5. 以上に述べた「近接仮説」について、再度、確認しておかなければならない重要なポイントがある。それは、「近接」という考え方が、質問項目のいわば「客観的ともいうべき意味内容」と、調査対象者がそれぞれの質問項目から読み取るいわば「主観的ともいうべき意味内容」の「一致」あるいは「不一致」をめぐって展開されるということである。そして、「SSAという統計的技法」は、まさにこのような両者の意味内容の「近接性」「類似性」「同一性」の確認を実証的に可能にするものである。

こうして、以上の1～4では、「SSAマップ」の「読み取り」という知的営為のプロセスを、段階的に説明してきた。それは、上述の区別からするならば、後者の「調査対象者が質問項目から読み取る、いわば主観的な意味内容の側面」に焦点

を合わせるものであった。

そこで、つぎに、前者の「調査票（質問紙）に記載された質問項目という、いわば客観的な意味内容の側面」に目を移すことになる。その場合、「8か国における宗教意識調査」の61の質問項目の意味内容の「客観的な検討」をどのように進めるかが、最大の問題となる。ここでは、それを、これら諸項目に含まれている「用語」に注目するという、いわゆる「内容分析（content analysis）」的な方法――Berelson（1954＝1957）は、その特徴を、①明示的、②客観的、③体系的、④数量的、と表現している――をとる。そのような方法によって、61の質問項目は大きく2つの種類に分けられる。

（1）「神」「霊」「魂」「聖なる力」「神秘」「宗教」「信仰」「祈り」「救い」「復活」「あの世」「死後」などの「超越的・形而上的な用語」を含む諸項目。
（2）「人間・人・自分」「他者」「感情」「思考」「行動」「本性」「執着」「利己心」「憎しみ」「怒り」「今、ここ」などの「人間的・形而下的な用語」を含む諸項目。

そして、（1）の「超越的・形而上的な用語を含む諸項目」は、さらに、つぎの2つの種類に分けられる。

①「神による奇跡はある」「神は存在する」「神は人間を救うために現れる」などの「信念・態度にかかわる諸項目」。
②「従う」「体験する」「読んだり聞いたりする」「行動」「実現する」「行い」「かかわる」「行為」などの「実践・行動にかかわる諸項目」。

いうまでもなく、ここでの方法は、61の質問項目の意味内容の「客観的な検討」の1つの方法にすぎない。しかし、筆者にとっては、現在の段階では、これ以外の方法は思いつかない。こうして、この方法以外に提案すべき方法が見つからない現在の段階にあっては、これを、ひとまず質問諸項目の客観的な分類の基準とした上で、「SSAマップ」の「読み取り」を進めることにする。

6. 上述の3のところで、「SSAマップ」には、①諸項目の空間布置に「凝集」が見られる部分と、②諸項目の空間布置に「拡散」が見られる部分、があるということを指摘するとともに、その①の部分をこの「SSAマップ」の「中心部分」、②の部分を「周辺部分」、とするという知的操作について説明した。そして、つぎに、そこから、以下のような「問い」が出てくることになる。

（1）そのような「中心部分」と呼んだその「部分」、つまりL. Guttmanの「ファセット・セオリー」の用語でいうならば、region（領域）の「範囲」をどこまでとするか。
（2）そのような「範囲」をどのような「形」――「幾何学的な形状」――で表現するか。

さて、「SSAマップ」の「読み取り」についての以上の記述は、どこまでも「素朴に空間布置の意味を探っていく」という方法についての解説という形で進めてきた。確かに、そのような探索は、新しい「知の創造」に向けてのきわめて重要な試みとなるものといわなければならない。しかし、そのような試みも、先人の残した「知の蓄積」と出逢うとき、さらに大きな「知の飛躍」がもたらされることになる。ここでの、このような先人の「知の蓄積」はというと、それは、Guttmanの「ファセット・セオリー」――すでに述べたように、それは「ファセット・デザイン」「ファセット・アナリシス（その1つがSSA）」とともに三位一体ともいうべき「知の体系」を構成する――にほかならない（Levy ed., 1994；真鍋, 1993 ; Manabe, 2001；木村・真鍋・安永・横田, 2002）。

こうして、「SSAマップ」の「読み取り」に、「ファセット・セオリー」を、そのための「手引き」として導入するのである。つぎに、その具体的な「道すじ」について、やや詳細に解説する。じつは、それは、上述の（1）と（2）の「問い」に答えることにつながるのである。繰り返しになるが、（1）は「SSAマップ」の中心部分、「ファセット・セオリー」の用語でいうならば、「中心

の領域（region）」の「範囲」をどこまでとするか、そして（2）はそのような「範囲」をどのような「幾何学的な形状」で表現するか、という問いである。

ここで、もう一度、「8 か国の統合データ」を用いた「SSA マップ」（図 2-②）に目をもどすならば、その「中心的な領域」に布置された質問諸項目は、「超越的・形而上的な意味を持つ用語を含む諸項目」のうちの「信念・態度にかかわる諸項目」であり、それらを取り囲む形でその外側の領域に布置された質問諸項目は、「超越的・形而上的な意味を持つ用語を含む諸項目」のうちの「実践・行動にかかわる諸項目」と「人間的・形而下的な意味を持つ用語を含む諸項目」であることがわかる。

こうして、「SSA」という統計的な技法を用いることで、質問諸項目の意味内容という「客観的な側面」と、調査対象者にとってのそれぞれの質問項目の意味内容という「主観的な側面」との「対応関係」が、これまた「客観的」に――つまり、「SSA マップにおける質問諸項目の空間布置」という技法が、「分析の結果が、だれが見ても分かるように、視覚的に示される」ものであり、「だれがやっても、同じ手続きをとるかぎり、同じ結果が得られる」ものであるという点において、その「対応関係」が、まさに「客観的」に――確認されることになる。

さて、以上のような質問諸項目の「SSA マップ」上での空間布置の形状の把握は、「素朴な観察」と、その「意味連関の探求」という手法からする限りにおいては、それら諸項目の位置を示す番号が凝集した部分の一番外側のものを線でつないでいくという仕方でなされる以外に、方法はない。その結果、その形状は、円の形に近いものでありながらも、完全な円の形とはならず、ややひずんだ円形の右下半分の欠けた形状として捉えられることになる。

これが、完全な円形として捉えられることになるのは、ここでの空間布置の「読み取り／解釈」に、「ファセット・セオリー」の考え方を導入することによって、初めて可能となる。そのような「ファセット・セオリー」の考え方こそが、図 1 に示した「ファセットの役割と regions との対応関係」の二番目の、Guttman が“Modular”と呼んだものにほかならない。

こうして、この「SSA マップ」において、「超越的・形而上的な用語を含む諸項目」のうちの「信念・態度にかかわる諸項目」が凝集して布置された「中心的な領域」は、これら諸項目の布置の外周が円の形で表現されることになる。では、図 2-①の「SSA マップ」において、その「空間布置」が、諸項目の位置を示す番号の散らばりの一番外側のものを線でつないでいくという場合は、完全な円の形とならないのは、なぜであろうか。それは、「ファセット・セオリー」の考え方からするならば、「8 か国における宗教意識調査」の質問諸項目が必ずしも「理論的・体系的・法則定立的」に作成されたものではなかったからであると説明されるであろう。確かに、この点においては、「8 か国における宗教意識調査」は「分析志向的」であるよりも、「記述志向的」な調査研究としての性格が強いものであったといわなければならない。そして、もしもこの調査の質問諸項目が「理論的・体系的・法則定立的なファセット・デザイン」にもとづいて作成されていたとするならば、その SSA による空間布置は、必ずやより完全な円の形を示したと考えられるのである。

以上の議論から、上述の（1）（2）の「問い」への筆者の「答え」は、もはや明らかであろう。それは、（1）SSA マップの「中心的な領域」は、「超越的・形而上的な用語を含む諸項目」のうちの「信念・態度にかかわる諸項目」の空間布置の範囲内とする、そして（2）そのような「範囲」は「円形」という「幾何学的な形状」によって表現される、というものである。

7. 以上のような手続きを踏まえて、「SSA マップ」における質問諸項目の「空間布置図」、つまり図 2-①は、あたかも人びとが「天空に輝く星々」を「星座」として認識するかのごとく、「空間分割図」へと形を変えていくことになる。それが図 2-②である。

繰り返しになるが、この図 2-②の「SSA マップ」で、一番内側の同心円内に布置された諸項目は、「超越的・形而上的な諸項目」のうちの「信念・態度にかかわる諸項目」、そしてその外側の

二番目の同心円内に布置された諸項目は、同じく「超越的・形而上的な諸項目」のうちの「実践・行動にかかわる諸項目」、さらに三番目の同心円内に布置された諸項目は、「人間的・形而下的な諸項目」である。

こうして、「8か国における宗教意識調査」の質問諸項目の、いわば「三層構造」ともいうべき「意味連関図／意味空間図」が完成することになる。この「三層構造」、つまり一番内側の同心円、二番目の真中の同心円、一番外側の同心円というように、同心円の広がりの形状として描き出された図2-②の「SSAマップ」は、SSAのHUDAP Windows版による計算結果のアウトプットである図2-①が「空間布置図」（いわば「天空の星々」）であったのに対して、それが「空間分割図」（いわば「星座」）と呼ばれるものへと形を変えた結果として捉えられるのである。

8. 以上においては、「8か国における宗教意識調査」の結果についての「SSAマップ」の「読み取り」をとおして、61の質問項目を、①「超越的・形而上的諸項目のうちの信念・態度にかかわる諸項目」、②「超越的・形而上的諸項目のうちの実践・行動にかかわる諸項目」、③「人間的・形而下的諸項目」、の3種類に視覚的に「分類」した。

それは、統計的なデータ分析の結果の「解釈」である。いうまでもなく、このような「解釈」は、「SSA」と呼ばれる技法にもとづく、質問項目の「意味連関」の探求——盛山和夫の表現を借用するならば、「意味世界の探求」——である。ここでは、そのような「意味連関」に焦点を合わせながら、「SSAマップ」の「読み取り」のプロセスを解説してきた。以下においては、いくつかの点を、再度、取りあげて、やや詳細に議論しておきたい。

（1）61の質問諸項目の3種類の諸項目への上述の「分類」は、それぞれの質問項目の個別的・具体的な「内容」——例えば、質問項目の順にいえば、「思考と感情をコントロールする」「宗教団体に従う」「神秘的な体験で我を忘れる」などの個別的・具体的な「内容」——にもとづく分類というよりも、むしろ、それら質問諸項目の一般的・抽象的な「性質」——それらが、①「超越的・形而上的なもの」であるか、それとも「人間的・形而下的なもの」であるか（人びとの志向のreferent（対象）の種類）、②「信念・態度にかかわるもの」であるか、それとも「実践・行動にかかわるもの」であるか（人びとの志向のcomponent（要素）の種類）、——にもとづく分類であるということができる。ここで「分類」という用語を使ったが、いうまでもなく、そのような「分類」は、調査対象者の「意識」のなかにあるものが、「SSAマップ」の幾何学的な図形に投射され、それを筆者が「読み取る」という知的営為をとおして可能となったものである。

（2）では、二番目の同心円の境界線は何を意味しているのであろうか。それは、西谷啓治（1996）の用語を借用するならば、「宗教と非宗教の間」ともいうべきものである。欧米の宗教社会学の視座からするならば、そのような境界線は、いわゆる「世俗化（secularization）の進展」にともなって、だんだん明確でなくなってきたとされている。それにもかかわらず、8か国の調査対象者の「意味世界」においては、やはり両者にははっきりと境界線が引かれるという結果になっている。いやむしろ、世界の多くの国ぐにで、今後、「教育の向上」「メディアの普及」「コミュニケーション・ネットワークの拡大」がさらに進んでいくとするならば、人びとの意識・観念・イメージのなかで「宗教と非宗教の間」についての境界線は、より広く共有されたものとなっていくとも考えられる。

こうして、この二番目の同心円の形状は、そのような人びとの「宗教的なるもの」についての意識・観念・イメージの存在を見事に描き出しているといえないであろうか。因みに、ここで「宗教的なるもの」と表現したのは、Durkheim（1912＝1975）、Otto（1936＝2010）、Eliade（1957＝1969）、Berger（1967＝1979）などによって、「聖なるもの」という用語で表現されたものときわめて近似のものということができるかもしれない。

（3）つぎに、一番目の同心円の境界線は、繰り

返しになるが、その内側の「超越的・形而上的な事柄についての信念・態度にかかわる諸項目」と、その外側の「超越的・形而上的な事柄についての実践・行動にかかわる諸項目」を領域区分する。具体的にいうならば、「信念・態度にかかわる諸項目」がほぼ円形――すでに述べたように、質問諸項目が、より理論的・体系的・法則定立的に準備されていたとするならば、その形状はより完全な円形に近いものとなったと考えられる――の形状で「SSA マップ」の中心部分に固まって集まっており、そのようなほぼ円形の諸項目の固まりを取り囲む形で、その外側に「実践・行動にかかわる諸項目」がやや散らばって位置している。

このような結果は、SSA の「technical な性格」から、一番目の同心円内に位置する諸項目の相互間の「相関関係」は大きく、それ比べるならば、それらの一番内側の同心円の諸項目と、それらの外側の、つまり一番目と二番目の同心円の間に位置する諸項目との「相関関係」は小さくなるということを示している。

それは、具体的にいうならば、「神の愛を感じる（12）」という項目に肯定的に答える人は、「神を信じることで心の安らぎが得られる（53）」という項目にも肯定的に答えるが、では、そのような人が、「神社、寺院、教会などに行く（10）」という項目や、「宗教の教えについての書物を読んだり話を聞いたりする（6）」という項目に対しても、同じ程度において肯定的に答えるかというと、必ずしもそうとはいえないということである。つまり、「信念・態度」と「実践・行動」との間には、ある程度の「乖離」が見られるということである。

さて、このような「SSA マップ」の「読み取り」に関しては、つぎの 3 点を指摘しておきたい。

①欧米の宗教社会学において中心的な位置づけがなされてきた「宗教性」というテーマについては、さまざまな理論的・実証的な研究が蓄積されてきた。そのような研究をとおして、「宗教性」は多次元的なものとして捉えられることになってきた。例えば Glock と Stark（1965）は、「宗教性」を「宗教的信念」「宗教的実践」「宗教的知識」「宗教的経験」「道徳的結果」の 5 つの次元に区別した。

ここで、「宗教的信念の次元」と、「宗教的実践の次元」は、今回の 8 か国の統合データの「SSA マップ」では、順に、「一番内側の同心円内の諸項目」と、「一番目の同心円と二番目の同心円の間に位置する諸項目」に対応するものということができる。こうして、欧米の宗教社会学において「理論的」に構成されてきた宗教性の主要な 2 つの次元が、「8 か国における宗教的意識調査」のデータ分析をとおして「実証的」に確認されたといえるのである。

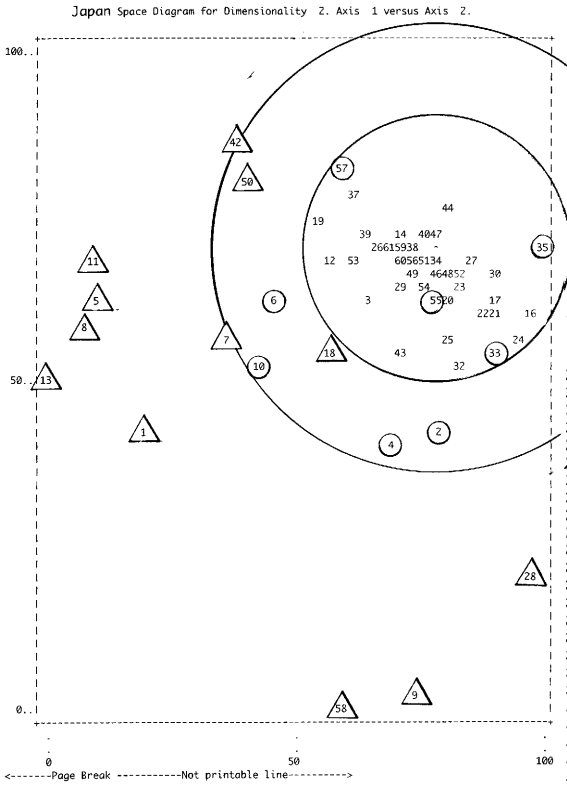
②すでに述べた、「宗教的信念」と「宗教的実践」は、「宗教性」を構成する諸次元のなかで、最も多く実証的研究が行なわれてきたものである。欧米のキリスト教社会にあっては、これらの「概念」が構成されてきた背景には、つぎのような考え方があった。

そもそも人びとの宗教的な覚醒というものは、人びとが超越的なものを「信じる」という内面の出来事から始まる。それは Religious Belief（宗教的信念）という形をとる。そして、そのような「信念」を外に向かって表現したものこそが Religious Practice（宗教的実践）にほかならない。したがって、たとえ外面的な行動は同じであっても、それが「信念」という内面に裏付けられていない行動、つまり「信念」をともなわない行動である場合は、Religious Practice とは呼ばないという考え方がそれである。

こうして、「『宗教的信念』から『宗教的実践』へ」という宗教性の発露は、ここでの「SSA マップ」における同心円の広がり、つまり一番内側の同心円から二番目の同心円へという空間分割の広がりとパラレルな関係にあることがわかるのである。

③最後に、「超越的・形而上的な諸項目」が「信念・態度にかかわる諸項目」と「実践・行動にかかわる諸項目」に同心円の広がりという形をとって区分されたのに対して、「人間的・形而下

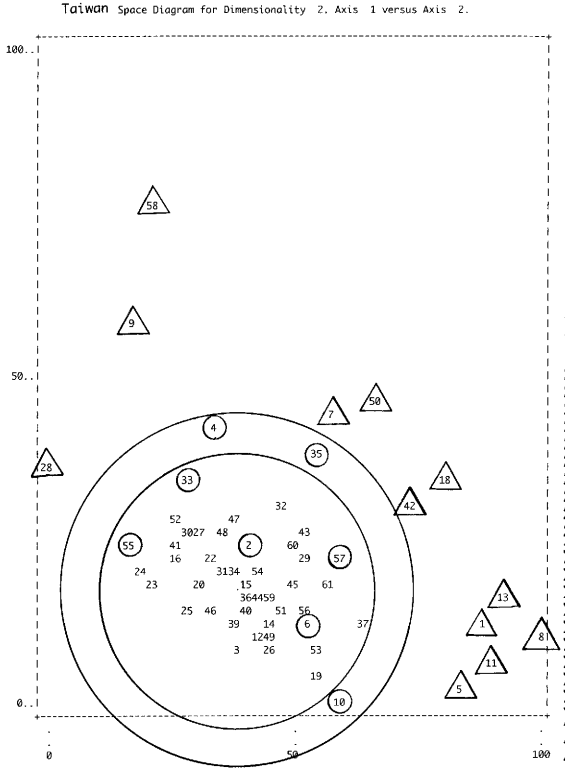
図3　日本の SSA マップ



変数ラベル

1 (151) 自分の思考と感情を、あらゆることに対して肯定的になるようコントロールすること。
2 (73) 宗教教団に従うこと。
3 (75) 「神」に従うこと。
4 (54) 神秘的な体験で、我を忘れること。
5 (175) 他者に憎しみや怒りを持たないようにすること。
6 (104) 宗教の教えについて、書物を読んだり話を聞いたりすること。
7 (97) 瞑想（めいそう）をすること。
8 (141) 「今、ここ」での瞬間を大切にすること。
9 (4) 世間や家族から離れ、ひっそりと隠れて住むこと。
10 (95) 宗教的行動として、神社、寺院、教会などに行くこと。
11 (112) あらゆることに、いつも感謝する気持ちをもつこと。
12 (30) 「神」の愛を感じること。
13 (209) 目の前のものごとに注意を集中すること。
14 (219) 「神」による奇跡はある。
15 (238) 人がこの世で経験するあらゆることは「神」が「魂」の成長のために与えた機会である。
16 (149) 信仰のために迫害されることは、大きな救いにつながる。
17 (106) 「神」を信じることで、病気が治る（なおる）。
18 (199) 世界は、精神と物質という二つの原理でなりたっている。
19 (196) 世界が理不尽に見えるからといって、「神」がいないことにはならない。
20 (56) 「神」を信じることで、この世での願望を実現することができる。
21 (49) この世界には最高の宗教があり、すべての宗教の教えは、その最高の宗教の教えに含まれる。
22 (222) 宗教教団を通じて、救いがもたらされる。
23 (80) 「神」に祈りをかなえてもらうためには、「神」の助けへの代償として、何かを行なったり捧げたりすることが必要だ。
24 (9) 人間は、死後に肉体をともなって、よみがえる。
25 (233) 死後の世界は、より幸福な世界とより苦しい世界に分かれている。
26 (115) 「神」は、存在する。
27 (215) 本当の幸福は、この世にあるのではなく、この世を超えたあの世にある。
28 (92) 運命は変えることができない。
29 (231) ある人の意識が純粋であるとき、そこに聖なる力がはたらく。
30 (108) 「神」を信じることで、社会的地位は上がる。
31 (156) 「神」の力によって、世界は維持され進化している。
32 (134) この世界以外にも、目に見えない世界がいくつかの上下の階層に分かれて存在している。
33 (212) 人は、その人が持って生まれた宿命を実現できれば幸福となり、実現できなければ不幸となる。
34 (166) 「神」は、人間を救うために現れる。
35 (163) 大災害は、人々の心・行いが正しくないことで起きる。
36 (117) 「神」またはその代理が、人間を救うために、この世に生まれてくることがある。
37 (94) 良い行ないにも悪い行ないにも、目に見えない力によって、それ相応の報いや罰がある。
38 (125) 人間は、この世界をより良いものにするという使命を、「神」から与えられている。
39 (32) 何か大きな見えない力によって、私たちは生かされている。
40 (91) 我が国は「神」によってまもられている。
41 (176) 宗教的儀礼において、食物を食べることで、「神」とつながることができる。
42 (152) 執着がなければ、人は苦しみから解放される。
43 (66) 人間の「魂」は清らかでけがれがない。
44 (33) 祈りや宗教的儀礼によって、人は災難や苦境から救われる。
45 (14) 人間と自然とは、どちらも「神」の一部であり、お互いにつながっている。
46 (223) 「神」を信じることで、死後の幸福を実現することができる。
47 (235) 欲望をコントロールすることで、聖なる力をえることができる。
48 (136) この世は仮（かり）のもので、本当に価値があるのは、この世を超えた別の世界である。
49 (192) 一つの「神」が、時と場合に応じて、異なる形で現れる。
50 (160) 利己心が、苦しみや不幸の原因である。
51 (184) 人間には、霊的に「神」に近い人もいれば遠い人もいる。
52 (236) 「神」は、自分自身を否定することで、創造や救済を行う。
53 (110) 「神」を信じることで、心の安らぎが得られる。
54 (127) 宗教的儀礼や修行によって、「魂」はより活発に働く。
55 (121) 「神」と人間とをつなぐなんらかの媒介が無ければ、人は「神」とかかわることができない。
56 (68) 霊の世界は、この世界と密接に関連し合っている。
57 (194) ある人が救われるかどうかは、その人の行為や思いが正しいかどうかで決まる。
58 (71) 人間の本性は悪である。
59 (164) 「神」の力により、死の不安や恐怖に打ち克つ（うちかつ）ことができる。
60 (213) より多くの人々が自分の「魂」を自覚すれば、世界や社会はそれだけよくなる。
61 (211) 人間を含むあらゆるものは、「魂」があるから存在することができる。

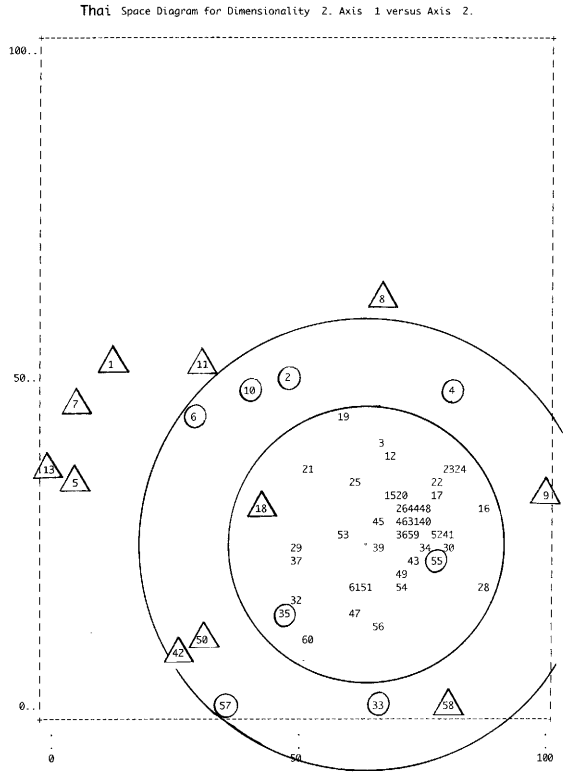
図4　台湾の SSA マップ



変数ラベル

1 (151) 自分の思考と感情を、あらゆることに対して肯定的になるようコントロールすること。
2 (73) 宗教教団に従うこと。
3 (75) 「神」に従うこと。
4 (54) 神秘的な体験で、我を忘れること。
5 (175) 他者に憎しみや怒りを持たないようにすること。
6 (104) 宗教の教えについて、書物を読んだり話を聞いたりすること。
7 (97) 瞑想（めいそう）をすること。
8 (141) 「今、ここ」での瞬間を大切にすること。
9 (4) 世間や家族から離れ、ひっそりと隠れて住むこと。
10 (95) 宗教的行動として、神社、寺院、教会などに行くこと。
11 (112) あらゆることに、いつも感謝する気持ちをもつこと。
12 (30) 「神」の愛を感じること。
13 (209) 目の前のものごとに注意を集中すること。
14 (219) 「神」による奇跡はある。
15 (238) 人がこの世で経験するあらゆることは「神」が「魂」の成長のために与えた機会である。
16 (149) 信仰のために迫害されることは、大きな救いにつながる。
17 (106) 「神」を信じることで、病気が治る（なおる）。
18 (199) 世界は、精神と物質という二つの原理でなりたっている。
19 (196) 世界が理不尽に見えるからといって、「神」がいないことにはならない。
20 (56) 「神」を信じることで、この世での願望を実現することができる。
21 (49) この世界には最高の宗教があり、すべての宗教の教えは、その最高の宗教の教えに含まれる。
22 (222) 宗教教団を通じて、救いがもたらされる。
23 (80) 「神」に祈りをかなえてもらうためには、「神」の助けへの代償として、何かを行なったり捧げたりすることが必要だ。
24 (9) 人間は、死後に肉体をともなって、よみがえる。
25 (233) 死後の世界は、より幸福な世界とより苦しい世界に分かれている。
26 (115) 「神」は、存在する。
27 (215) 本当の幸福は、この世にあるのではなく、この世を超えたあの世にある。
28 (92) 運命は変えることができない。
29 (231) ある人の意識が純粋であるとき、そこに聖なる力がはたらく。
30 (108) 「神」を信じることで、社会的地位は上がる。
31 (156) 「神」の力によって、世界は維持され進化している。
32 (134) この世界以外にも、目に見えない世界がいくつかの上下の階層に分かれて存在している。
33 (212) 人は、その人が持って生まれた宿命を実現できれば幸福となり、実現できなければ不幸となる。
34 (166) 「神」は、人間を救うために現れる。
35 (163) 大災害は、人々の心・行いが正しくないことで起きる。
36 (117) 「神」またはその代理が、人間を救うために、この世に生まれてくることがある。
37 (94) 良い行ないにも悪い行ないにも、目に見えない力によって、それ相応の報いや罰がある。
38 (125) 人間は、この世界をより良いものにするという使命を、「神」から与えられている。
39 (32) 何か大きな見えない力によって、私たちは生かされている。
40 (91) 我が国は「神」によってまもられている。
41 (176) 宗教的儀礼において、食物を食べることで、「神」とつながることができる。
42 (152) 執着がなければ、人は苦しみから解放される。
43 (66) 人間の「魂」は清らかでけがれがない。
44 (33) 祈りや宗教的儀礼によって、人は災難や苦境から救われる。
45 (14) 人間と自然とは、どちらも「神」の一部であり、お互いにつながっている。
46 (223) 「神」を信じることで、死後の幸福を実現することができる。
47 (235) 欲望をコントロールすることで、聖なる力をえることができる。
48 (136) この世は仮（かり）のもので、本当に価値があるのは、この世を超えた別の世界である。
49 (192) 一つの「神」が、時と場合に応じて、異なる形で現れる。
50 (160) 利己心が、苦しみや不幸の原因である。
51 (184) 人間には、霊的に「神」に近い人もいれば遠い人もいる。
52 (236) 「神」は、自分自身を否定することで、創造や救済を行う。
53 (110) 「神」を信じることで、心の安らぎが得られる。
54 (127) 宗教的儀礼や修行によって、「魂」はより活発に働く。
55 (121) 「神」と人間とをつなぐなんらかの媒介が無ければ、人は「神」とかかわることができない。
56 (68) 霊の世界は、この世界と密接に関連し合っている。
57 (194) ある人が救われるかどうかは、その人の行為や思いが正しいかどうかで決まる。
58 (71) 人間の本性は悪である。
59 (164) 「神」の力により、死の不安や恐怖に打ち克つ（うちかつ）ことができる。
60 (213) より多くの人々が自分の「魂」を自覚すれば、世界や社会はそれだけよくなる。
61 (211) 人間を含むあらゆるものは、「魂」があるから存在することができる。

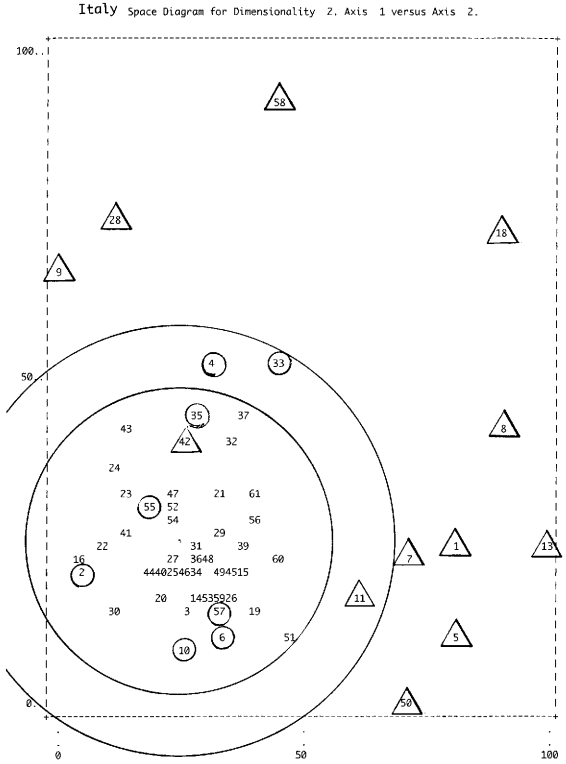
図5 タイのSSAマップ



変数ラベル

1 (151) 自分の思考と感情を、あらゆることに対して肯定的になるようコントロールすること。
2 (73) 宗教教団に従うこと。
3 (75) 「神」に従うこと。
4 (54) 神秘的な体験で、我を忘れること。
5 (175) 他者に憎しみや怒りを持たないようにすること。
6 (104) 宗教の教えについて、書物を読んだり話を聞いたりすること。
7 (97) 瞑想（めいそう）をすること。
8 (141) 「今、ここ」での瞬間を大切にすること。
9 (4) 世間や家族から離れ、ひっそりと隠れて住むこと。
10 (95) 宗教的行動として、神社、寺院、教会などに行くこと。
11 (112) あらゆることに、いつも感謝する気持ちをもつこと。
12 (30) 「神」の愛を感じること。
13 (209) 目の前のものごとに注意を集中すること。
14 (219) 「神」による奇跡はある。
15 (238) 人がこの世で経験するあらゆることは「神」が「魂」の成長のために与えた機会である。
16 (149) 信仰のために迫害されることは、大きな救いにつながる。
17 (106) 「神」を信じることで、病気が治る（なおる）。
18 (199) 世界は、精神と物質という二つの原理でなりたっている。
19 (196) 世界が理不尽に見えるからといって、「神」がいないことにはならない。
20 (56) 「神」を信じることで、この世での願望を実現することができる。
21 (49) この世界には最高の宗教があり、すべての宗教の教えは、その最高の宗教の教えに含まれる。
22 (222) 宗教教団を通じて、救いがもたらされる。
23 (80) 「神」に祈りをかなえてもらうためには、「神」の助けへの代償として、何かを行なったり捧げたりすることが必要だ。
24 (9) 人間は、死後に肉体をともなって、よみがえる。
25 (233) 死後の世界は、より幸福な世界とより苦しい世界に分かれている。
26 (115) 「神」は、存在する。
27 (215) 本当の幸福は、この世にあるのではなく、この世を超えたあの世にある。
28 (92) 運命は変えることができない。
29 (231) ある人の意識が純粋であるとき、そこに聖なる力がはたらく。
30 (108) 「神」を信じることで、社会的地位は上がる。
31 (156) 「神」の力によって、世界は維持され進化している。
32 (134) この世界以外にも、目に見えない世界がいくつかの上下の階層に分かれて存在している。
33 (212) 人は、その人が持って生まれた宿命を実現できれば幸福となり、実現できなければ不幸となる。
34 (166) 「神」は、人間を救うために現れる。
35 (163) 大災害は、人々の心・行いが正しくないことで起きる。
36 (117) 「神」またはその代理が、人間を救うために、この世に生まれてくることがある。
37 (94) 良い行ないにも悪い行ないにも、目に見えない力によって、それ相応の報いや罰がある。
38 (125) 人間は、この世界をより良いものにするという使命を、「神」から与えられている。
39 (32) 何か大きな見えない力によって、私たちは生かされている。
40 (91) 我が国は「神」によってまもられている。
41 (176) 宗教的儀礼において、食物を食べることで、「神」とつながることができる。
42 (152) 執着がなければ、人は苦しみから解放される。
43 (66) 人間の「魂」は清らかでけがれがない。
44 (33) 祈りや宗教的儀礼によって、人は災難や苦境から救われる。
45 (14) 人間と自然とは、どちらも「神」の一部であり、お互いにつながっている。
46 (223) 「神」を信じることで、死後の幸福を実現することができる。
47 (235) 欲望をコントロールすることで、聖なる力をえることができる。
48 (136) この世は仮（かり）のもので、本当に価値があるのは、この世を超えた別の世界である。
49 (192) 一つの「神」が、時と場合に応じて、異なる形で現れる。
50 (160) 利己心が、苦しみや不幸の原因である。
51 (184) 人間には、霊的に「神」に近い人もいれば遠い人もいる。
52 (236) 「神」は、自分自身を否定することで、創造や救済を行う。
53 (110) 「神」を信じることで、心の安らぎが得られる。
54 (127) 宗教的儀礼や修行によって、「魂」はより活発に働く。
55 (121) 「神」と人間とをつなぐなんらかの媒介が無ければ、人は「神」とかかわることができない。
56 (68) 霊の世界は、この世界と密接に関連し合っている。
57 (194) ある人が救われるかどうかは、その人の行為や思いが正しいかどうかで決まる。
58 (71) 人間の本性は悪である。
59 (164) 「神」の力により、死の不安や恐怖に打ち克つ（うちかつ）ことができる。
60 (213) より多くの人々が自分の「魂」を自覚すれば、世界や社会はそれだけよくなる。
61 (211) 人間を含むあらゆるものは、「魂」があるから存在することができる。

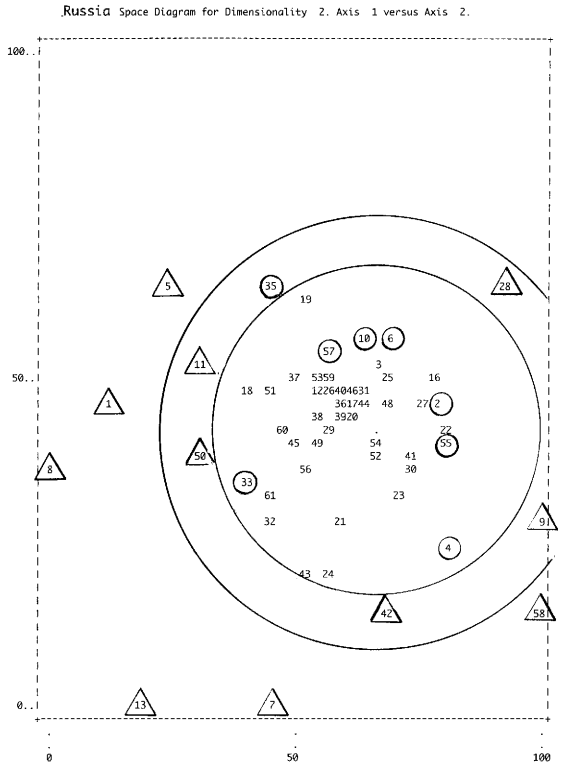
図6　イタリアの SSA マップ



変数ラベル

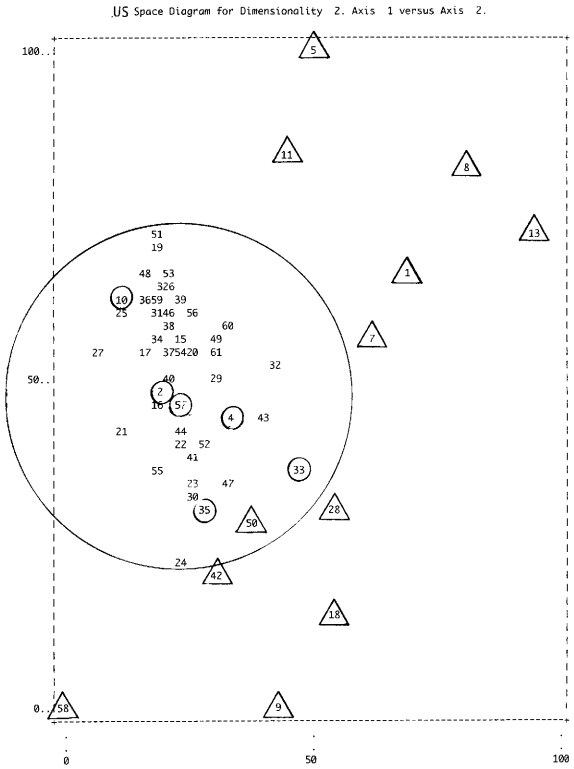
1 (151) 自分の思考と感情を、あらゆることに対して肯定的になるようコントロールすること。
2 (73) 宗教教団に従うこと。
3 (75) 「神」に従うこと。
4 (54) 神秘的な体験で、我を忘れること。
5 (175) 他者に憎しみや怒りを持たないようにすること。
6 (104) 宗教の教えについて、書物を読んだり話を聞いたりすること。
7 (97) 瞑想（めいそう）をすること。
8 (141) 「今、ここ」での瞬間を大切にすること。
9 (4) 世間や家族から離れ、ひっそりと隠れて住むこと。
10 (95) 宗教的行動として、神社、寺院、教会などに行くこと。
11 (112) あらゆることに、いつも感謝する気持ちをもつこと。
12 (30) 「神」の愛を感じること。
13 (209) 目の前のものごとに注意を集中すること。
14 (219) 「神」による奇跡はある。
15 (238) 人がこの世で経験するあらゆることは「神」が「魂」の成長のために与えた機会である。
16 (149) 信仰のために迫害されることは、大きな救いにつながる。
17 (106) 「神」を信じることで、病気が治る（なおる）。
18 (199) 世界は、精神と物質という二つの原理でなりたっている。
19 (196) 世界が理不尽に見えるからといって、「神」がいないことにはならない。
20 (56) 「神」を信じることで、この世での願望を実現することができる。
21 (49) この世界には最高の宗教があり、すべての宗教の教えは、その最高の宗教の教えに含まれる。
22 (222) 宗教教団を通じて、救いがもたらされる。
23 (80) 「神」に祈りをかなえてもらうためには、「神」の助けへの代償として、何かを行なったり捧げたりすることが必要だ。
24 (9) 人間は、死後に肉体をともなって、よみがえる。
25 (233) 死後の世界は、より幸福な世界とより苦しい世界に分かれている。
26 (115) 「神」は、存在する。
27 (215) 本当の幸福は、この世にあるのではなく、この世を超えたあの世にある。
28 (92) 運命は変えることができない。
29 (231) ある人の意識が純粋であるとき、そこに聖なる力がはたらく。
30 (108) 「神」を信じることで、社会的地位は上がる。
31 (156) 「神」の力によって、世界は維持され進化している。
32 (134) この世界以外にも、目に見えない世界がいくつかの上下の階層に分かれて存在している。
33 (212) 人は、その人が持って生まれた宿命を実現できれば幸福となり、実現できなければ不幸となる。
34 (166) 「神」は、人間を救うために現れる。
35 (163) 大災害は、人々の心・行いが正しくないことで起きる。
36 (117) 「神」またはその代理が、人間を救うために、この世に生まれてくることがある。
37 (94) 良い行ないにも悪い行ないにも、目に見えない力によって、それ相応の報いや罰がある。
38 (125) 人間は、この世界をより良いものにするという使命を、「神」から与えられている。
39 (32) 何か大きな見えない力によって、私たちは生かされている。
40 (91) 我が国は「神」によってまもられている。
41 (176) 宗教的儀礼において、食物を食べることで、「神」とつながることができる。
42 (152) 執着がなければ、人は苦しみから解放される。
43 (66) 人間の「魂」は清らかでけがれがない。
44 (33) 祈りや宗教的儀礼によって、人は災難や苦境から救われる。
45 (14) 人間と自然とは、どちらも「神」の一部であり、お互いにつながっている。
46 (223) 「神」を信じることで、死後の幸福を実現することができる。
47 (235) 欲望をコントロールすることで、聖なる力をえることができる。
48 (136) この世は仮（かり）のもので、本当に価値があるのは、この世を超えた別の世界である。
49 (192) 一つの「神」が、時と場合に応じて、異なる形で現れる。
50 (160) 利己心が、苦しみや不幸の原因である。
51 (184) 人間には、霊的に「神」に近い人もいれば遠い人もいる。
52 (236) 「神」は、自分自身を否定することで、創造や救済を行う。
53 (110) 「神」を信じることで、心の安らぎが得られる。
54 (127) 宗教的儀礼や修行によって、「魂」はより活発に働く。
55 (121) 「神」と人間とをつなぐなんらかの媒介が無ければ、人は「神」とかかわることができない。
56 (68) 霊の世界は、この世界と密接に関連し合っている。
57 (194) ある人が救われるかどうかは、その人の行為や思いが正しいかどうかで決まる。
58 (71) 人間の本性は悪である。
59 (164) 「神」の力により、死の不安や恐怖に打ち克つ（うちかつ）ことができる。
60 (213) より多くの人々が自分の「魂」を自覚すれば、世界や社会はそれだけよくなる。
61 (211) 人間を含むあらゆるものは、「魂」があるから存在することができる。

図7 ロシアの SSA マップ



変数ラベル
1 (151) 自分の思考と感情を、あらゆることに対して肯定的になるようコントロールすること。
2 (73) 宗教教団に従うこと。
3 (75) 「神」に従うこと。
4 (54) 神秘的な体験で、我を忘れること。
5 (175) 他者に憎しみや怒りを持たないようにすること。
6 (104) 宗教の教えについて、書物を読んだり話を聞いたりすること。
7 (97) 瞑想（めいそう）をすること。
8 (141) 「今、ここ」での瞬間を大切にすること。
9 (4) 世間や家族から離れ、ひっそりと隠れて住むこと。
10 (95) 宗教的行動として、神社、寺院、教会などに行くこと。
11 (112) あらゆることに、いつも感謝する気持ちをもつこと。
12 (30) 「神」の愛を感じること。
13 (209) 目の前のものごとに注意を集中すること。
14 (219) 「神」による奇跡はある。
15 (238) 人がこの世で経験するあらゆることは「神」が「魂」の成長のために与えた機会である。
16 (149) 信仰のために迫害されることは、大きな救いにつながる。
17 (106) 「神」を信じることで、病気が治る（なおる）。
18 (199) 世界は、精神と物質という二つの原理でなりたっている。
19 (196) 世界が理不尽に見えるからといって、「神」がいないことにはならない。
20 (56) 「神」を信じることで、この世での願望を実現することができる。
21 (49) この世界には最高の宗教があり、すべての宗教の教えは、その最高の宗教の教えに含まれる。
22 (222) 宗教教団を通じて、救いがもたらされる。
23 (80) 「神」に祈りをかなえてもらうためには、「神」の助けへの代償として、何かを行なったり捧げたりすることが必要だ。
24 (9) 人間は、死後に肉体をともなって、よみがえる。
25 (233) 死後の世界は、より幸福な世界とより苦しい世界に分かれている。
26 (115) 「神」は、存在する。
27 (215) 本当の幸福は、この世にあるのではなく、この世を超えたあの世にある。
28 (92) 運命は変えることができない。
29 (231) ある人の意識が純粋であるとき、そこに聖なる力がはたらく。
30 (108) 「神」を信じることで、社会的地位は上がる。
31 (156) 「神」の力によって、世界は維持され進化している。
32 (134) この世界以外にも、目に見えない世界がいくつかの上下の階層に分かれて存在している。
33 (212) 人は、その人が持って生まれた宿命を実現できれば幸福となり、実現できなければ不幸となる。
34 (166) 「神」は、人間を救うために現れる。
35 (163) 大災害は、人々の心・行いが正しくないことで起きる。
36 (117) 「神」またはその代理が、人間を救うために、この世に生まれてくることがある。
37 (94) 良い行ないにも悪い行ないにも、目に見えない力によって、それ相応の報いや罰がある。
38 (125) 人間は、この世界をより良いものにするという使命を、「神」から与えられている。
39 (32) 何か大きな見えない力によって、私たちは生かされている。
40 (91) 我が国は「神」によってまもられている。
41 (176) 宗教的儀礼において、食物を食べることで、「神」とつながることができる。
42 (152) 執着がなければ、人は苦しみから解放される。
43 (66) 人間の「魂」は清らかでけがれがない。
44 (33) 祈りや宗教的儀礼によって、人は災難や苦境から救われる。
45 (14) 人間と自然とは、どちらも「神」の一部であり、お互いにつながっている。
46 (223) 「神」を信じることで、死後の幸福を実現することができる。
47 (235) 欲望をコントロールすることで、聖なる力をえることができる。
48 (136) この世は仮（かり）のもので、本当に価値があるのは、この世を超えた別の世界である。
49 (192) 一つの「神」が、時と場合に応じて、異なる形で現れる。
50 (160) 利己心が、苦しみや不幸の原因である。
51 (184) 人間には、霊的に「神」に近い人もいれば遠い人もいる。
52 (236) 「神」は、自分自身を否定することで、創造や救済を行う。
53 (110) 「神」を信じることで、心の安らぎが得られる。
54 (127) 宗教的儀礼や修行によって、「魂」はより活発に働く。
55 (121) 「神」と人間とをつなぐなんらかの媒介が無ければ、人は「神」とかかわることができない。
56 (68) 霊の世界は、この世界と密接に関連し合っている。
57 (194) ある人が救われるかどうかは、その人の行為や思いが正しいかどうかで決まる。
58 (71) 人間の本性は悪である。
59 (164) 「神」の力により、死の不安や恐怖に打ち克つ（うちかつ）ことができる。
60 (213) より多くの人々が自分の「魂」を自覚すれば、世界や社会はそれだけよくなる。
61 (211) 人間を含むあらゆるものは、「魂」があるから存在することができる。

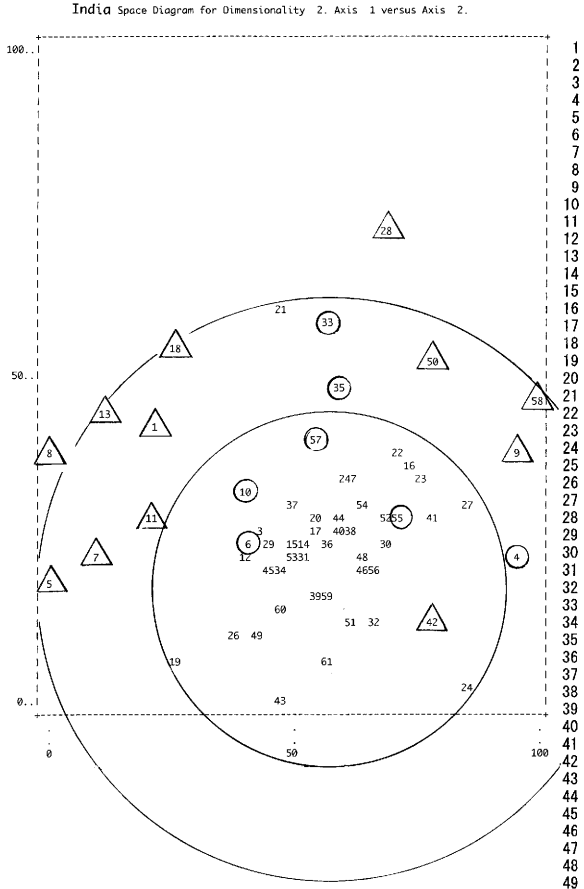
図8　アメリカ合衆国の SSA マップ



変数ラベル

1 (151) 自分の思考と感情を、あらゆることに対して肯定的になるようコントロールすること。
2 (73) 宗教教団に従うこと。
3 (75) 「神」に従うこと。
4 (54) 神秘的な体験で、我を忘れること。
5 (175) 他者に憎しみや怒りを持たないようにすること。
6 (104) 宗教の教えについて、書物を読んだり話を聞いたりすること。
7 (97) 瞑想（めいそう）をすること。
8 (141) 「今、ここ」での瞬間を大切にすること。
9 (4) 世間や家族から離れ、ひっそりと隠れて住むこと。
10 (95) 宗教的行動として、神社、寺院、教会などに行くこと。
11 (112) あらゆることに、いつも感謝する気持ちをもつこと。
12 (30) 「神」の愛を感じること。
13 (209) 目の前のものごとに注意を集中すること。
14 (219) 「神」による奇跡はある。
15 (238) 人がこの世で経験するあらゆることは「神」が「魂」の成長のために与えた機会である。
16 (149) 信仰のために迫害されることは、大きな救いにつながる。
17 (106) 「神」を信じることで、病気が治る（なおる）。
18 (199) 世界は、精神と物質という二つの原理でなりたっている。
19 (196) 世界が理不尽に見えるからといって、「神」がいないことにはならない。
20 (56) 「神」を信じることで、この世での願望を実現することができる。
21 (49) この世界には最高の宗教があり、すべての宗教の教えは、その最高の宗教の教えに含まれる。
22 (222) 宗教教団を通じて、救いがもたらされる。
23 (80) 「神」に祈りをかなえてもらうためには、「神」の助けへの代償として、何かを行なったり捧げたりすることが必要だ。
24 (9) 人間は、死後に肉体をともなって、よみがえる。
25 (233) 死後の世界は、より幸福な世界とより苦しい世界に分かれている。
26 (115) 「神」は、存在する。
27 (215) 本当の幸福は、この世にあるのではなく、この世を超えたあの世にある。
28 (92) 運命は変えることができない。
29 (231) ある人の意識が純粋であるとき、そこに聖なる力がはたらく。
30 (108) 「神」を信じることで、社会的地位は上がる。
31 (156) 「神」の力によって、世界は維持され進化している。
32 (134) この世界以外にも、目に見えない世界がいくつかの上下の階層に分かれて存在している。
33 (212) 人は、その人が持って生まれた宿命を実現できれば幸福となり、実現できなければ不幸となる。
34 (166) 「神」は、人間を救うために現れる。
35 (163) 大災害は、人々の心・行いが正しくないことで起きる。
36 (117) 「神」またはその代理が、人間を救うために、この世に生まれてくることがある。
37 (94) 良い行ないにも悪い行ないにも、目に見えない力によって、それ相応の報いや罰がある。
38 (125) 人間は、この世界をより良いものにするという使命を、「神」から与えられている。
39 (32) 何か大きな見えない力によって、私たちは生かされている。
40 (91) 我が国は「神」によってまもられている。
41 (176) 宗教的儀礼において、食物を食べることで、「神」とつながることができる。
42 (152) 執着がなければ、人は苦しみから解放される。
43 (66) 人間の「魂」は清らかでけがれがない。
44 (33) 祈りや宗教的儀礼によって、人は災難や苦境から救われる。
45 (14) 人間と自然とは、どちらも「神」の一部であり、お互いにつながっている。
46 (223) 「神」を信じることで、死後の幸福を実現することができる。
47 (235) 欲望をコントロールすることで、聖なる力をえることができる。
48 (136) この世は仮（かり）のもので、本当に価値があるのは、この世を超えた別の世界である。
49 (192) 一つの「神」が、時と場合に応じて、異なる形で現れる。
50 (160) 利己心が、苦しみや不幸の原因である。
51 (184) 人間には、霊的に「神」に近い人もいれば遠い人もいる。
52 (236) 「神」は、自分自身を否定することで、創造や救済を行う。
53 (110) 「神」を信じることで、心の安らぎが得られる。
54 (127) 宗教的儀礼や修行によって、「魂」はより活発に働く。
55 (121) 「神」と人間とをつなぐなんらかの媒介が無ければ、人は「神」とかかわることができない。
56 (68) 霊の世界は、この世界と密接に関連し合っている。
57 (194) ある人が救われるかどうかは、その人の行為や思いが正しいかどうかで決まる。
58 (71) 人間の本性は悪である。
59 (164) 「神」の力により、死の不安や恐怖に打ち克つ（うちかつ）ことができる。
60 (213) より多くの人々が自分の「魂」を自覚すれば、世界や社会はそれだけよくなる。
61 (211) 人間を含むあらゆるものは、「魂」があるから存在することができる。

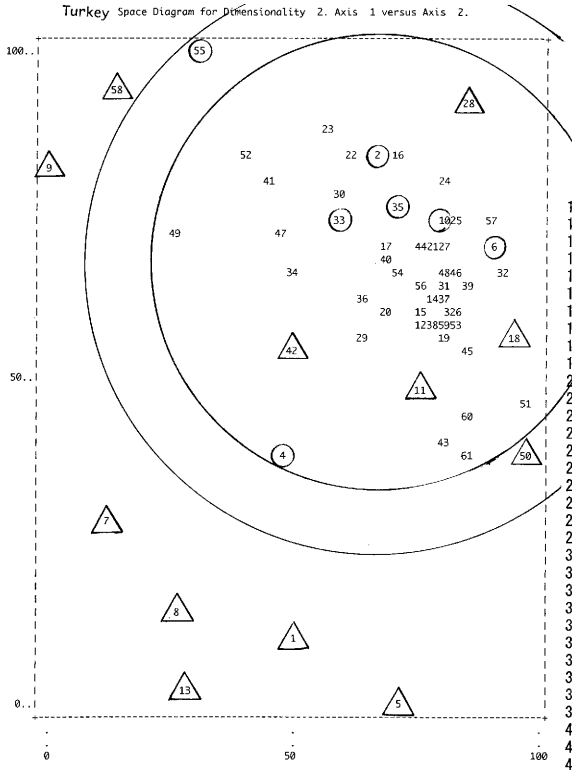
図9 インドの SSA マップ



変数ラベル

1 (151) 自分の思考と感情を、あらゆることに対して肯定的になるようコントロールすること。
2 (73) 宗教教団に従うこと。
3 (75) 「神」に従うこと。
4 (54) 神秘的な体験で、我を忘れること。
5 (175) 他者に憎しみや怒りを持たないようにすること。
6 (104) 宗教の教えについて、書物を読んだり話を聞いたりすること。
7 (97) 瞑想（めいそう）をすること。
8 (141) 「今、ここ」での瞬間を大切にすること。
9 (4) 世間や家族から離れ、ひっそりと隠れて住むこと。
10 (95) 宗教的行動として、神社、寺院、教会などに行くこと。
11 (112) あらゆることに、いつも感謝する気持ちをもつこと。
12 (30) 「神」の愛を感じること。
13 (209) 目の前のものごとに注意を集中すること。
14 (219) 「神」による奇跡はある。
15 (238) 人がこの世で経験するあらゆることは「神」が「魂」の成長のために与えた機会である。
16 (149) 信仰のために迫害されることは、大きな救いにつながる。
17 (106) 「神」を信じることで、病気が治る（なおる）。
18 (199) 世界は、精神と物質という二つの原理でなりたっている。
19 (196) 世界が理不尽に見えるからといって、「神」がいないことにはならない。
20 (56) 「神」を信じることで、この世での願望を実現することができる。
21 (49) この世界には最高の宗教があり、すべての宗教の教えは、その最高の宗教の教えに含まれる。
22 (222) 宗教教団を通じて、救いがもたらされる。
23 (80) 「神」に祈りをかなえてもらうためには、「神」の助けへの代償として、何かを行なったり捧げたりすることが必要だ。
24 (9) 人間は、死後に肉体をともなって、よみがえる。
25 (233) 死後の世界は、より幸福な世界とより苦しい世界に分かれている。
26 (115) 「神」は、存在する。
27 (215) 本当の幸福は、この世にあるのではなく、この世を超えたあの世にある。
28 (92) 運命は変えることができない。
29 (231) ある人の意識が純粋であるとき、そこに聖なる力がはたらく。
30 (108) 「神」を信じることで、社会的地位は上がる。
31 (156) 「神」の力によって、世界は維持され進化している。
32 (134) この世界以外にも、目に見えない世界がいくつかの上下の階層に分かれて存在している。
33 (212) 人は、その人が持って生まれた宿命を実現できれば幸福となり、実現できなければ不幸となる。
34 (166) 「神」は、人間を救うために現れる。
35 (163) 大災害は、人々の心・行いが正しくないことで起きる。
36 (117) 「神」またはその代理が、人間を救うために、この世に生まれてくることがある。
37 (94) 良い行ないにも悪い行ないにも、目に見えない力によって、それ相応の報いや罰がある。
38 (125) 人間は、この世界をより良いものにするという使命を、「神」から与えられている。
39 (32) 何か大きな見えない力によって、私たちは生かされている。
40 (91) 我が国は「神」によってまもられている。
41 (176) 宗教的儀礼において、食物を食べることで、「神」とつながることができる。
42 (152) 執着がなければ、人は苦しみから解放される。
43 (66) 人間の「魂」は清らかでけがれがない。
44 (33) 祈りや宗教的儀礼によって、人は災難や苦境から救われる。
45 (14) 人間と自然とは、どちらも「神」の一部であり、お互いにつながっている。
46 (223) 「神」を信じることで、死後の幸福を実現することができる。
47 (235) 欲望をコントロールすることで、聖なる力をえることができる。
48 (136) この世は仮（かり）のもので、本当に価値があるのは、この世を超えた別の世界である。
49 (192) 一つの「神」が、時と場合に応じて、異なる形で現れる。
50 (160) 利己心が、苦しみや不幸の原因である。
51 (184) 人間には、霊的に「神」に近い人もいれば遠い人もいる。
52 (236) 「神」は、自分自身を否定することで、創造や救済を行う。
53 (110) 「神」を信じることで、心の安らぎが得られる。
54 (127) 宗教的儀礼や修行によって、「魂」はより活発に働く。
55 (121) 「神」と人間とをつなぐなんらかの媒介が無ければ、人は「神」とかかわることができない。
56 (68) 霊の世界は、この世界と密接に関連し合っている。
57 (194) ある人が救われるかどうかは、その人の行為や思いが正しいかどうかで決まる。
58 (71) 人間の本性は悪である。
59 (164) 「神」の力により、死の不安や恐怖に打ち克つ（うちかつ）ことができる。
60 (213) より多くの人々が自分の「魂」を自覚すれば、世界や社会はそれだけよくなる。
61 (211) 人間を含むあらゆるものは、「魂」があるから存在することができる。

図 10　トルコの SSA マップ



変数ラベル

1 (151) 自分の思考と感情を、あらゆることに対して肯定的になるようコントロールすること。
2 (73) 宗教教団に従うこと。
3 (75) 「神」に従うこと。
4 (54) 神秘的な体験で、我を忘れること。
5 (175) 他者に憎しみや怒りを持たないようにすること。
6 (104) 宗教の教えについて、書物を読んだり話を聞いたりすること。
7 (97) 瞑想（めいそう）をすること。
8 (141) 「今、ここ」での瞬間を大切にすること。
9 (4) 世間や家族から離れ、ひっそりと隠れて住むこと。
10 (95) 宗教的行動として、神社、寺院、教会などに行くこと。
11 (112) あらゆることに、いつも感謝する気持ちをもつこと。
12 (30) 「神」の愛を感じること。
13 (209) 目の前のものごとに注意を集中すること。
14 (219) 「神」による奇跡はある。
15 (288) 人がこの世で経験するあらゆることは「神」が「魂」の成長のために与えた機会である。
16 (149) 信仰のために迫害されることは、大きな救いにつながる。
17 (106) 「神」を信じることで、病気が治る（なおる）。
18 (199) 世界は、精神と物質という二つの原理でなりたっている。
19 (196) 世界が理不尽に見えるからといって、「神」がいないことにはならない。
20 (56) 「神」を信じることで、この世での願望を実現することができる。
21 (49) この世界には最高の宗教があり、すべての宗教の教えは、その最高の宗教の教えに含まれる。
22 (222) 宗教教団を通じて、救いがもたらされる。
23 (80) 「神」に祈りをかなえてもらうためには、「神」の助けへの代償として、何かを行なったり捧げたりすることが必要だ。
24 (9) 人間は、死後に肉体をともなって、よみがえる。
25 (233) 死後の世界は、より幸福な世界とより苦しい世界に分かれている。
26 (115) 「神」は、存在する。
27 (215) 本当の幸福は、この世にあるのではなく、この世を超えたあの世にある。
28 (92) 運命は変えることができない。
29 (231) ある人の意識が純粋であるとき、そこに聖なる力がはたらく。
30 (108) 「神」を信じることで、社会的地位は上がる。
31 (156) 「神」の力によって、世界は維持され進化している。
32 (134) この世界以外にも、目に見えない世界がいくつかの上下の階層に分かれて存在している。
33 (212) 人は、その人が持って生まれた宿命を実現できれば幸福となり、実現できなければ不幸となる。
34 (166) 「神」は、人間を救うために現れる。
35 (163) 大災害は、人々の心・行いが正しくないことで起きる。
36 (117) 「神」またはその代理が、人間を救うために、この世に生まれてくることがある。
37 (94) 良い行ないにも悪い行ないにも、目に見えない力によって、それ相応の報いや罰がある。
38 (125) 人間は、この世界をより良いものにするという使命を、「神」から与えられている。
39 (32) 何か大きな見えない力によって、私たちは生かされている。
40 (91) 我が国は「神」によってまもられている。
41 (176) 宗教的儀礼において、食物を食べることで、「神」とつながることができる。
42 (152) 執着がなければ、人は苦しみから解放される。
43 (66) 人間の「魂」は清らかでけがれがない。
44 (33) 祈りや宗教的儀礼によって、人は災難や苦境から救われる。
45 (14) 人間と自然とは、どちらも「神」の一部であり、お互いにつながっている。
46 (223) 「神」を信じることで、死後の幸福を実現することができる。
47 (235) 欲望をコントロールすることで、聖なる力をえることができる。
48 (136) この世は仮（かり）のもので、本当に価値があるのは、この世を超えた別の世界である。
49 (192) 一つの「神」が、時と場合に応じて、異なる形で現れる。
50 (160) 利己心が、苦しみや不幸の原因である。
51 (184) 人間には、霊的に「神」に近い人もいれば遠い人もいる。
52 (236) 「神」は、自分自身を否定することで、創造や救済を行う。
53 (110) 「神」を信じることで、心の安らぎが得られる。
54 (127) 宗教的儀礼や修行によって、「魂」はより活発に働く。
55 (121) 「神」と人間とをつなぐなんらかの媒介が無ければ、人は「神」とかかわることができない。
56 (68) 霊の世界は、この世界と密接に関連し合っている。
57 (194) ある人が救われるかどうかは、その人の行為や思いが正しいかどうかで決まる。
58 (71) 人間の本性は悪である。
59 (164) 「神」の力により、死の不安や恐怖に打ち克つ（うちかつ）ことができる。
60 (213) より多くの人々が自分の「魂」を自覚すれば、世界や社会はそれだけよくなる。
61 (211) 人間を含むあらゆるものは、「魂」があるから存在することができる。

的な諸項目」については、そのような区分はできなかった。この点については、ここでも、この調査の質問諸項目が「ファセット・デザイン」のような形で理論的・体系的・法則定立的に準備されたものでなかったことによるものと考えられる。

Ⅴ．8 か国のそれぞれの「SSA マップ」の検討

以上において、8 か国のそれぞれの「SSA マップ」（図 3〜10）についての検討の準備が、ようやく整った。いうまでもなく、その準備というのは、つぎの 2 つである。

（1）「SSA マップ」の「読み取り」、つまり SSA と呼ばれる統計的なデータ分析の結果（アウトプット）の「読み取り／解釈」を、スムーズに進めていくために、いくつかの「操作」を行なう。

（2）8 か国の統合データにもとづく「SSA マップ」を、ここでの 8 か国のそれぞれの「SSA マップ」を検討するための、いわば「基準」ともいうべきものとして設定する。

ここでは、（1）の「操作」にもとづいて、（2）の「基準」を用いて、8 か国のそれぞれの「SSA マップ」の検討を進めていく。いうまでもなく、そのような「基準」の内容は、「SSA マップ」が「三層構造」で構成されているというものである。そこで、ここでの 8 か国のそれぞれの「SSA マップ」の検討では、つぎの 2 点をチェック・ポイントとする。

①「超越的・形而上的な諸項目」と「人間的・形而下的諸項目」が、円の内と外という形で区分されるかどうか。

②「超越的・形而上的諸項目」が、もう 1 つの円（つまりもう 1 つの同心円）を描くことによって、「信念・態度の諸項目」と「実践・行動の諸項目」に区分されるかどうか。

さて、8 か国の「SSA マップ」を概観するならば、いずれの国の「SSA マップ」においても、そこに 2 つの同心円を描き入れることで、明確な「三層構造」を構成するということは必ずしも容易でないことがわかる。それは、上述の「基準」となる「SSA マップ」において明確に 3 種類に分類された諸項目が、8 か国のそれぞれの「SSA マップ」においては、さまざまに混ざり合った形となっているからにほかならない。

そこで、このような諸項目の混ざり合いの形をできるだけわかりやすく描写するために、それぞれの「SSA マップ」に以下のような操作を行なうことにした。

1）61 の質問諸項目が 3 種類に分類されたことについては、たびたび述べてきた。それは、

①「超越的・形而上的な諸項目のうちの信念・態度にかかわる諸項目」、

②「超越的・形而上的な諸項目のうちの実践・行動にかかわる諸項目」、

③「人間的・形而下的な諸項目」、

の 3 種類である。これら諸項目の性質が、「SSA マップ」において、一目で識別できるように、つぎのような標記を行なった。それは、③の諸項目の番号を△印で囲む、②の諸項目の番号を〇印で囲む、①の諸項目の番号はそのままにしておく、というものである。

2）上述の①の諸項目の番号を包摂するような形で円を描く。

3）その円の回りに散らばる②の諸項目の番号を包摂するような形で同心円を描く。

以上が、8 か国それぞれの「SSA マップ」を検討するための操作である。

では、このような操作を行なうことで、各国の「SSA マップ」（図 3〜10）から、どのような知見が得られるであろうか。それは、各国の「相違点」と「類似点」としてまとめられる。

1. 各国の「SSA マップ」に見られる相違点

（1）相違点の第 1 は、「超越的・形而上的諸項目のうちの信念・態度にかかわる諸項目」を包摂する円の「大きさ」である。それは、これら諸項目の「凝集度」を捉える指標となる。では、この「凝集度」が何を意味しているかというと、すで

に「SSA マップ」の「読み取り」の手順のところで述べたように、それら質問諸項目の相互間の「相関関係」の大きさ、つまりそれらの「意味内容」の「近似性・類似性・同一性」を示している。そして、そのような「凝集度」の高さは、人びとの、①「宗教性（より一般的・日常的な用語でいうならば、「信仰心」ともいうべきもの）」と、②「宗教観（同じく、「宗教とはかくかくしかじかのものである」という観念のようなもの）」、の「一次元性」の高さを示していると考えられる。

こうして、以上のような「凝集度」は、ごく大まかに、「日本・台湾・タイ」「イタリア・ロシア・アメリカ合衆国」「インド」「トルコ」という高→低の順位となっていることがわかる。「トルコ」と、そして「インド」の「凝集度」の低さは注目される。因みに、「インド」の場合は、ほかの国ぐにで、そのような「凝集している諸項目」の 1 つに数えられる項目番号の 21 が、例外的に、その「凝集」の円からやや離れて位置していることも注目される。この点についての、「なぜ」の究明は興味深い今後の課題となる

（2）相違点の第 2 は、一番内側の同心円内の△印の数である。この点については、「日本」「台湾」「ロシア」が 0、「タイ」「イタリア」「アメリカ合衆国」「インド」が 1、「トルコ」が 4 となっている。この結果からするならば、「トルコ」以外の 7 か国では、「超越的・形而上的な信念・態度の諸項目」と「人間的・形而下的な諸項目」との混ざり合いは、「全くない」か、あるいは「きわめて少ない」といえる。この点で、「トルコ」は例外的な国として性格づけられる。では、「トルコ」は「なぜ」そうなのかの究明は、今後に残された興味深い課題といえよう。

（3）相違点の第 3 は、一番内側の同心円内の○印の数である。8 か国のそれぞれの「SSA マップ」の検討のための「基準」とした統合データについての「SSA マップ」においては、○印のついた諸項目はすべて、一番内側の同心円と二番目の同心円との間に位置づけられた。ところが、8 か国のそれぞれの「SSA マップ」においては、○印のついた諸項目が、かなりの数で、一番内側に円内に入り込んでいる。このような質問諸項目の混ざり合いは、それら諸項目の「意味内容」の混ざり合いを意味している。具体的にいうならば、「信念・態度という側面」と「実践・行動という側面」とが相互に異なるものとされていないということである。そして、その度合いが「タイ」「日本」で低く、「イタリア」「ロシア」「アメリカ合衆国」「インド」「トルコ」「台湾」で高いということである。とくに、「アメリカ合衆国」においては、○印のついた諸項目が、すべて一番内側の同心円内に混ざり込んでいるために、二番目の同心円を描くことができないという結果になったことは注目される。この点についての「なぜ」の究明も、興味深い今後の課題といえよう。

2. 各国の「SSA マップ」に見られる類似点

以上においては、8 か国のそれぞれの「SSA マップ」に見られる「相違点」について記述してきた。これらの「相違点」は、質問諸項目の「凝集度」のレベルの違いであり、そして、それらの「混ざり合い」の度合いの違いであった。いずれの場合も、それらはいわゆる「程度の差」ともいうべき違いであった。

では、このような「程度の差」ともいうべき違いとは異なる違い、そのような違いを越えた違いとして、どのような違いが考えられるであろうか。その 1 つの例として、つぎのようなことを考えてみたい。

繰り返しになるが、ここでは、統合データについての「SSA マップ」から、質問諸項目の「三層構造」と呼んだ人びとの回答のパターンを「読み取っ」た。そこで、同じくデータ分析をとおして、そのような諸項目の「構造化」あるいは「パターン化」とは全く異なる「形態」あるいは「無形態」が「発見」されるとするならば、それは、「程度の差」とは異なる、いわば「構造／パターンの差」というものであろう。

具体的にいうならば、質問諸項目について、例えば、「宗教性・教義に関する諸項目」と「精神性・スピリチュアリティに関する諸項目」が「SSA マップ」において、2 つの凝集部分（あるいは中心部分）を構成するというようなことがあ

るとするならば、それは全く別の構造化／パターン化の事例ということがいえるであろう。

いずれにしても、SSA という統計的なデータ分析を用いた本研究においては、以上のような全く別の「構造化／パターン化」が見られるということはなかった。つまり、8 か国それぞれの「SSA マップ」に、国ごとに「程度の差」ともいうべき「違い」は見られたものの、それらも「三層構造」と名づけた「基本構造／パターン」を完全に否定するものとはならなかった。こうして、このような「基本構造／パターン」こそが、「8 か国それぞれの SSA マップ」に見られる「類似点／共通点」にほかならないのである。

Ⅵ. おわりに——まとめと今後の展望——

本稿は、「宗教性の概念・測定・分析」という研究領域において、つぎの 2 点において意義あるものといえよう。

(1) methodological な意義

本稿では、「8 か国における宗教意識調査」の結果に対して、L. Guttman の開発になる SSA と呼ばれる統計的な技法を用いて、独自なデータ分析を試みた。それを「独自なデータ分析」と位置づけたのは、「SSA マップ」の「読み取り」において筆者の独自なアイディアを展開したからにほかならない。そのアイディアを、筆者は、「素朴な観察にもとづく質問諸項目の空間布置の意味連関の読み取り」と「Guttman のファセット・セオリーの導入にもとづく質問諸項目の空間布置の意味連関の読み取り」との統合・融合・結合と表現しておきたい。ここで、「読み取り」という表現を用いたが、それは、換言するならば、「解釈」ということもできる。

因みに、Berger と Kellner（1981＝1987）は、「すべての社会学的営為は、解釈という行為と生死をともにしなければならない」として、その重要性を主張している。そして、そのような認識に立つかぎり、社会調査のデータ分析においても、その結果の「解釈」——ここでの表現を用いるならば「読み取り」——は、データ分析に携わる研究者の知的営為にとって最も重要な局面のはずである。確かに、盛山和夫（2004）も、「社会調査とは解釈であり、解釈とは意味世界を探求することである」として、社会調査における「解釈」の重要性を強調している。これは、まさに筆者の考え方と軌を一にするものといわなければならない。

ただ、本稿においては、そのような「解釈」を、そのための「方法」の提案——「素朴な観察にもとづく意味連関の読み取り」と「ファセット・セオリーの導入にもとづく意味連関の読み取り」の統合・融合・結合という方法の提案——と一体の形で展開したという点において、その独自性が主張できるのである。そして、この点こそが、本稿の methodological な意義ということになるのである。

(2) substantive な意義

ここで「substantive な意義」とは、以上のようなデータ分析の結果の「読み取り／解釈」の具体的な内容そのものにある。繰り返しになるが、それは、人びとの宗教意識を捉える質問諸項目が、8 か国のそれぞれの「SSA マップ」において、いわば「程度の差」ともいうべき違いは見られるものの、その「基本構造／パターン」においては、①「超越的・形而上的な信念・態度の諸項目」、②「超越的・形而上的な実践・行動の諸項目」、③「人間的・形而下的な諸項目」、の三層構造をなしている、ということである。

では、このような「読み取り／解釈」の結果には、どのような「substantive な意義」があるといえるのであろうか。そのような意義の 1 つは、何よりもまず、つぎの点にある。それは、質問紙調査という形で人びとの宗教意識を観察するならば、調査対象となった人びとは、8 か国のどの国においても、調査の質問諸項目に対して、「個別的・具体的な内容」という点からというよりも、それら諸項目の「一般的・抽象的な性質」という点から、「識別反応」をしていることがわかった、ということである。ここで調査対象に取りあげた 8 か国は「カトリック」「プロテスタント」「ロシア正教」「イスラム教」「ヒンドゥー教」「仏教」「道教」というように、それぞれの宗教文化は大きく異なるものであるにもかかわらず、それらの

国ぐにの調査対象者は、質問諸項目に対して、基本的に同じ「構造／パターン」を示す回答をしている。文字どおり地球規模において「グローバリゼーション」の進展する現代社会にあって、人びとの「宗教的な観念・イメージ・意識」には、ある種の「同型性（isomorphism）」とも呼ぶべき傾向――中沢新一（2008）の用語――が表れているといえるかもしれない。これは、きわめて重要な発見といわなければならない。そして、この点こそが、本稿の substantive な意義ということになるのである。

最後に、本稿で残された問題についても記しておきたい。この点についても、「実証的な問題」と「理論的な問題」の 2 つがあげられる。

1. 実証的な問題

本稿では、前稿で残された問題に取り組むことを目標としてきた。そして、そのような問題の 1 つが、川端（2016）の「因子分析」の結果と筆者の「SSA」の結果との比較ということであった。この問題は、本稿でのデータ分析をとおして、単なる「技法」の違いということにとどまるものではないことが示唆された。それは、上述の「substantive な知見」と切っても切れない関係にある。

ごく簡潔にまとめておくならば、川端の「因子分析」の結果の「読み取り／解釈」では、質問諸項目の「個別的・具体的な内容」――具体的にいうならば、「神観念」「救済観」「苦悩観」「精神の安定」――というところに焦点が合わされたのに対して、筆者の「SSA」の結果の「読み取り／解釈」では、それら質問諸項目の「一般的・抽象的な性質」というところに光が当てられることになった。このことは、「技法」が異なれば、対象の違った「側面」が見えてくるということを示唆しているかもしれない。

そして、そうであるとするならば、このような問題については、より詳細な方法論的検討が必要となってくる。この問題については、稿を改めてより根本的に議論することを計画したい。

2. 理論的な問題

本稿で残された「理論的な問題」も、つぎの 2 つの側面に分けられる。

（1）本稿のデータ分析が、科学研究費による共同研究でなされた「8 か国における宗教意識調査」にもとづくものであることは、たびたび述べてきた。そして、このような調査研究が開始されることになった初めの問題関心は、「人びとの宗教性に共通する普遍的・基底的・包括的・本質的な諸要素の探求」というところにあった。

しかし、このような問題関心そのものが、上述のデータ分析の結果と、その「読み取り／解釈」の試みをとおして、若干の修正を迫られることになった。それは、つぎの 2 点である。

①この「8 か国における宗教意識調査」で捉えられているものは、人びとの「宗教性」そのものというよりも、「グローバル化」の進展する現代社会における人びとの「宗教的な観念・イメージ・意識」――具体的にいうならば、「そもそも宗教といったものは、かくかくしかじかのものである」といった観念・イメージ・意識――をも含むものなのではなかろうか、ということである。

②同じく、「8 か国における宗教意識調査」で捉えられているものは、人びとの宗教的な観念・イメージ・意識の「諸要素」というよりも、そのような諸要素の相互間の意味連関の「構造」――質問諸項目の意味内容の「近接性」の視座からする「識別反応」の「構造」――の「共通性」といったものなのではなかろうか、ということである。

そして、そうであるならば、以上の 2 つの修正点を踏まえて、では、そのような人びとの宗教的な観念・イメージ・意識の意味連関の構造は、「一次元的に捉えられるものであろうか」、それとも「多次元的に捉えられるものであろうか」という問題が改めて提起されることになる。

この点のついての筆者の基本的な考え方は、以下のとおりである。人びとの「宗教的な観念・イメージ・意識」の「一次元性」の側面に焦点を合わせるか、それとも「多次元性」の側面に光を当てるかは、それが「どちらかにしなければならな

い」という問題ではなく、「その研究の理論的な目標がどこにあるか」によって決まる問題のはずである。

確かに、本稿でのデータ分析をとおして、ここでの人びとの宗教意識に関する質問諸項目は「一次元」的にも、「多次元的」にも捉えられるものであることがわかった。それは、すでに前稿でも検討したように、つぎの2点にまとめられる。

①「SSA マップ」がそこにもとづいているところの統合データについての「相関マトリックス」――より正確にいえば「弱単調性係数のマトリックス」――において、質問諸項目の相互間の関係は、1つの例外的なケース――項目58「人間の本性は悪である」と項目5「他者に憎しみや怒りを持たないようにすること」との－0.06の関係のケース――を除いて、すべてプラスとなっている。この結果は、ここでの質問諸項目が、人びとの宗教的な「観念・イメージ・意識」という同じ意味内容を持つものであることを示しており、その意味で「一次元」的なものとして捉えられる。

②「SSA マップ」に対する筆者の提案する「素朴な観察という方法」と、Guttman の「ファセット・セオリーの導入という方法」にもとづいて、宗教的な「観念・イメージ・意識」の「三層構造」という「読み取り／解釈」が可能となったことから、それが「多次元」的なものとして捉えられる。

そして、そうであるならば、それは「一次元」的にも、「多次元」的にも捉えられるものであるといわなければならない。

こうして、ここでの実証的な研究の成果を、どのように理論構築のなかに組み込んでいくかが、今後の重要な課題となってくるのである。

(2) 以上においては、「理論」という用語をいわば説明ぬきで使ってきた。しかし、いうまでもなく、社会科学においては、「理論」という用語は、「経験理論（empirical theory)」と「規範理論(normative theory)」の2つの側面を持つ。

ここで、もう一度、筆者によるデータ分析の出発点となった科学研究費による共同研究の問題関心に立ち返る。それは、「人びとの宗教性に共通する普遍的・基底的・包括的・本質的な諸要素の探求」ということであった。しかし、前稿と本稿のデータ分析をとおして、そこで分析されたものは、「人びとの宗教性」そのものというよりも、「人びとの宗教的な観念・イメージ・意識」、具体的にいうならば、「人びとの宗教とはかくかくしかじかなものであるといった、宗教についての見方・考え方・感じ方」をも含むものである可能性が高い。こうして、そのような「人びとの観念・イメージ・意識」の諸要素の「意味連関」の「構造」に、交差国家的に共通性・近似性・類似性が出てきているという「読み取り／解釈」が導かれたのである。このような「発見」は、まさしく新しい「経験理論」の構築の出発点となる。しかも、それは「経験理論」の構築に資するにとどまるものではない。さらに、「規範理論」の構築の方向をも示唆するものとなる。

そのような方向への導線の1つが「宗教多元主義」と呼ばれる思想・哲学・神学であることは間違いない。しかし、本稿は、すでに予定の文字数を大きく越えてしまっている。この点についても、再度、稿を改めて考えていくことにしたい。

文献

Amar, Reuven and Toledano, Shlomo（2001）. *HUDAP Manual with Mathematics and Windows Interface*（Second Edition), The Hebrew University of Jerusalem.

Berelson, Bernard R., 稲葉三千夫、金圭煥訳（1954＝1957）.「内容分析」『社会心理学講座7』、みすず書房。

Berger, Peter L., 薗田稔訳（1967＝1979）.『聖なる天蓋』新曜社。

Berger, Peter L. and Luckmann, Thomas, 山口節郎訳（1966＝1977）.『日常世界の構成』新曜社。

Berger, Peter L. and Kellner, Hansfried, 森下伸也訳（1981＝1987）.『社会学再考：方法としての解釈』新曜社。

Durlheim, Èmile, 古野清人訳（1912＝1975）.『宗教生活の原初形態』岩波文庫。

Eliade, Mircea, 風間敏夫訳（1957＝1969）.『聖と俗』法政大学出版局。

福岡伸一（2010）.『ルリボシカミキリの青』文藝春秋。
Glock, Charles Y., and Stark, Rodney（1965）. *Religion and Society in Tension.* Rand MacNally.
川端亮（2016）.「宗教的信念における共通の因子――8カ国調査の結果から――」『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』第42巻。
木村通治・真鍋一史・安永幸子・横田賀英子（2002）.『ファセット理論と解析事例』ナカニシヤ出版。
Levy, Shlomit ed.（1994）. *Louis Guttman on Theory and Methodology : Selected Writings,* Dartmouth.
真鍋一史（1993）.『社会・世論調査のデータ分析』慶応義塾大学出版会。
真鍋一史（2016）.「『宗教性』の概念・測定・分析――『8か国における宗教意識調査』を事例として――」『関西学院大学社会学部紀要』第125号。
Manabe, Kazufumi（2001）. *Facet Theory and Studies of Japanese Society : From a Comparative Perspective,* Bier'sche Verlangsanstalt, Bonn, Germany.
McGaw, Dickinson and Watson, George（1976）. *Political and Social Inquiry,* John Wiley and Sons.
中沢新一（2008）.『古代から来た未来人　折口信夫』ちくまプリマー新書。
西谷啓治著、上田閑照編（1996）.『宗教と非宗教の間』岩波書店。
Otto, Rudolf, 久松英二訳（1936＝2010）.『聖なるもの』岩波文庫。
Rorschach, Hermann, 片口安史訳（1921＝1976）.『精神診断学』（改訂版）金子書房。
盛山和夫（2004）.『社会調査法入門』有斐閣。
安田三郎（1969）.『社会調査ハンドブック』（新版）有斐閣双書。

謝辞

本稿は、大正大学の星川啓慈教授を代表とする科学研究費基盤研究（A）「生命主義と普遍宗教性による多元主義の展開――国際データによる理論と実証の接合――」（課題番号25244002）の研究成果の一部である。

共同研究のメンバーである大正大学の星川啓慈、関東学院大学の渡辺光一、大阪大学の川端亮、関西学院大学の對馬路人、東京工業大学の弓山達也、桜美林大学の長谷川（間瀬）恵美、北海道大学の宮嶋俊一、大阪府立大学の秋庭裕、大正大学の松野智章、上智大学の島薗進、慶應義塾大学の樫尾直樹の諸先生方との議論にもとづいて、ここでの「データ分析」が進められた。このような共同研究の機会が与えられたことに、心から感謝したいと思う。

筆者による「データ分析」は、すでに内外の学会で、順次、その成果を発表してきた。1つは、「宗教と社会」学会第24回学術大会（2016年6月11日・12日、上越教育大学）における「宗教性の概念・測定・分析――国際比較調査データの探索的分析――」と題する研究発表で、この発表に対して、北海道大学の櫻井義秀先生から貴重なコメントをいただいた。ここに記して、心から感謝の意を表したい。

そして、もう1つは「European Survey Research Association」第7回大会（2017年7月17日～21日、リスボン大学・ポルトガル）における「The Measurement Instruments of Japanese Religiosity from a Comparative Perspective」と題する研究発表で、そこでは、思いがけず多くの参加者から、欧米キリスト教社会を越えた国際比較の視座に対して、高い関心と評価を得ることができた。なお、この国際学会への参加が、星川先生のご配慮で、科学研究費補助金によって可能となったものであることを、感謝をもって付記しておきたい。

最後に、調査データのコンピュータ処理については、北海道大学大学院博士課程の清水香基氏にお世話になった。この点も、ここに記して、心から感謝の意を表したい。

Concept, Measurement and Analysis of Religiosity (II):

Survey Results from Eight Countries

ABSTRACT

This Paper is a sequel of my former paper entitled "Concept, Measurement and Analysis of Religiosity: Survey Results from Eight Countries" (Kwansei Gakuin University School of Sociology Journal No.125). In my former paper, I analyzed an integrated data set of the Religious Consciousness Survey in Eight Countries (India, Turkey, Japan, the United States, Italy, Taiwan, Thailand, and Russia). This survey was conducted online through a research company panel in 1915, and was financially supported by Japan Society for the Promotion of Science (Kiban-Kenkyu (A) No.25244002).

The data analysis method used was Smallest Space Analysis (SSA) developed by Louis Guttman. The SSA map showed that the items related to people's religious consciousness were divided into three groups: (1) the items positioned within the inner concentric circle: transcendental and metaphysical consciousness items, and more specifically, religious beliefs and attitudes items, (2) the items positioned within the middle concentric circle: transcendental and metaphysical consciousness items, and more specifically, religious practice and behavior items, (3) the items positioned within the outer concentric circle: human and physical consciousness items.

Based on this result, the purpose of the current data analysis is to confirm whether the structure of the interrelationships between the items of people's religious consciousness is expressed in the same geometrical configuration of a threefold stratification in all of the eight countries.

The results of the data analysis shown are as follows:

1. In the SSA maps of all eight countries, the items of people's religious consciousness are plotted around the center of concentric circles.
2. The SSA maps of the eight countries have similarities in terms of their overall geometric shape, but differences are evident in the space plot of each item, that is to say, the mixture of the items in the three regions-concentric circles-are observed.
3. The differences observed are, so to speak, the differences of degrees. And, the space plots of the items on the eight countries' SSA maps are basically the same as in the SSA map from the integrated data set. That is to say, they do in fact reflect the configuration pattern which is described as a threefold stratification of people's religious consciousness.

These findings suggest the possibility of the same structure pattern of relationships among religious consciousness items across eight countries.

Key Words: religiosity, religious notion, image and consciousness, Smallest Space Analysis (SSA), Facet Theory, Factor Analysis